特233
466

（昭和十五年改訂版）

早稲田大學教授
稲毛金七稿

本稿

哲學概論

世界堂書店刊行

始

特233
466

（昭和十五年改訂版）

早稲田大學教授
稲毛金七稿

本稿

哲學概論

世界堂書店刊行

特233
466

（昭和十五年改訂版）

早稲田大學教授
稲毛金七稿

本稿

哲學概論

世界堂書店刊行

昭和十五年 帝國大學 紀元

目次

第一章　哲學の意義……一
第一節　哲學の語義……一
第二節　哲學の形式……三
第一項　哲學の構造……三
第二項　哲學の本質……五
第三節　哲學の內容……一〇
第四節　哲學の方法……一二
第一項　哲學の態度……一三
第二項　哲學の研究法……一四

第三項　哲學の創建法……一六
第五節　哲學の體系……二〇
第二章　哲學の價値……二三
第三章　哲學の定義……二九
第四章　人生論……三〇
第一節　人生論の意義……三〇
第二節　價値の本質……三三
第三節　人生觀の種類……三五
第四節　人生觀の批評……四三
第五節　人生の本質……六一
第一項　人生の定義……六一

第二項　人生の本質—自覺としての人生……六一
第三項　人生の精髓—創造としての人生……六四
第四項　人生の形態……六九
第五項　人生の內容及び分野……七〇
第六項　人生の過程……七一
第五章　宇宙論……七五
第一節　宇宙論の意義……七五
第二節　宇宙論の種類……七七
第三節　宇宙の本質……八三
第六章　認識論……八五
第一節　認識論の意義……八五

第二節　認識論の分野……八八
第三節　認識の本質……八九
第一項　認識の可能……八九
第二項　認識の要素……九三
第三項　認識の對象……九九
第四節　認識の理想——眞理……一〇四
第一項　眞理の性質……一〇四
第二項　眞理の動力……一〇七
第三項　眞理の標準……一〇九
第四項　眞理の價値……一一一
第五項　眞理の種類……一一三
（附錄）研究問題……一一五

稿本

哲學概論

稲毛金七稿

第一章　哲學の意義

第一節　哲學の語義

（一）歐洲語。「哲學」(Philosophy—英, Philosophie—佛・獨) の原語は、希臘語の Philosophia で「愛 (Philos) 知 (Sophia)」の義である。

この語が成語となつたのは、紀元前五世紀頃で、今日よりも廣い意味に使用され、術語となつたのは同四世紀頃で、純理的、卽ち知識のために知識を求める義に用ゐられた。

(二) **日本語。** 邦譯は、始めは、理學・性理學・聖學等の文字を當て嵌めてゐたが、西周が、明治十年に始めて「哲學」といふ日本語を試みてから、一般に流用されるやうになつた。尙「哲」には、あきらかさとし・正しい道理を知る・才智がすぐれる等の意義がある。

第二節　哲學の形式

哲學の意義は、形式と內容との二面から見ることが出來る。

先づ哲學の形式について見るに、これは、更に、構造と本質との二面から見ることが出來る。

第一項　哲學の構造

(一) **意義。** 哲學は、人間の造つたものである。然らば、其の構成要素は何か。動力・素材及び機會が卽ちこれである。

(二) **構造。** (1) **哲學の動力。** 哲學の動力は、哲學の主要素で、所謂哲學的精神、卽ち、人性の精髓たる自覺性又は最も高い意味の理性である。

哲學的精神は、一方から見れば、根本的(徹底的・全體的・普遍的)綜合的(統一

的(價値的精神であり、他方から見れば、自己超越的精神、詳しくは、自識的(反省的・批判的)にして自律的(自由的・超越的・發展的・永遠的)な精神である。

尙、哲學的精神には、個人的なもの(例へば、カント哲學の動力)と團體的なもの(例へば日本哲學の動力)との別がある。

(2) **哲學の素材**。哲學の素材は、哲學的精神を發動せしめると共に、其の內容となるもので、廣義の知識又は思想、卽ち、常識・神語・俚諺・科學及び舊哲學等である。

(3) **哲學の機會**。哲學の機會は、哲學の動力と素材とを結合させることによつて、哲學構成の直接原因となるもので、修養(自修・敎育)・特殊な經驗・特殊な思索研究・思想學問の變化發達及び(所謂驚異の情)を發せしめる)新奇な事象の出現等である。

第二項　哲學の本質

(一) **意義**。哲學の本質は、哲學の根本特質、卽ち、哲學をして、哲學といふ一個獨得の學問たらしめるものである。

(二) **本質**。哲學の本質は、「實在の本質に關する全體的自覺の學」たるところに存する。

(1) **哲學は「學」である**。哲學は何よりも先づ學である。然るに、學は、實在の論理的自覺、卽ち實在が、自己の本質を十分に發現せんがために、其の動力たる自覺性を最も有效に活用すること及び其の成果である。別言すれば、實在中、最も自覺的な人間が、其の本性中最も自覺的な理性の一面たる知的理性を直接動力として、自己(知的理性)を始め、全實在を一定の立場から反省し認識した成果を、原理によつて組織し、且これを論理的形式で表現した合理的知識、詳しくは、確乎たる理由根據に基づき、一定の目的

と方法と素材とで構成した、明確にして而も永遠に發展する目的的・方法的・系統的・進歩的知識で、廣義の思想に屬し、實行又は實生活とも、非學的思想たる、常識・私見・趣味・信念・信仰とも異り、且科學と哲學とを二大分野とするものである。

(2) **哲學は、「實在の本質に關する全體的自覺の學」である。**「實在の本質學」は、對象から見た哲學の本質であり、「全體的自覺の學」は、主體及び方法から見た、卽ち對象を超越する方面から見た哲學の本質であるが故に、哲學の全き本質の二面に他ならないが、而も哲學は、對象的認識でない點から見れば、後者は一層重要であり、且全體的自覺を他にして實在の本質は認識し得ないのである。

(三)**哲學と科學。** 斯くの如き哲學の本質は、哲學をして、同じく學たる科學から其自身を區別して特に「哲學」たらしめる根本特質である。卽ち、科學は事實又は存在の學であり、部分的自覺の學であり、隨つて、特殊的・抽象的・假定的・間接的・經驗的・對象的・客觀的・表面的・相對的な合理的知識であるのに對し、哲學は、あらゆる事實の存在と認識とを可能ならしむるもの、卽ち本質又は存在性の學で、普遍的・具象的・無假定的・直接的・體驗的・作用的・主體的・究極的・絶對的な合理的知識である。哲學が、自己を始めあらゆるものを對象とすると共に、全我的作用であり、其の考へ方が徹底的・根源的であり、隨つて「學の學」と呼ばれるのも、亦これがために他ならない。

但し、上古に於ては、哲學と科學との別がなく、且科學が哲學の中に包含されてゐたが、次第に分化し、今日では、兩者各獨立してゐるけれども、それがために兩者を矛盾すると見るのは誤りで、寧ろ補合的關係を有するものと見なくてはならない。而も、哲學は、單なる科學の綜合ではなくて科學の假定を闡明してそれに基礎を附與するものであるが故に、科學よりも一段高い學的地位を占めるのである。そして哲學の分野中、科學と最も關係の近密なものは、認識論である。これ、認識論が科學批判といはれ

る所以である。

(四) 哲學と宗教及び藝術。 更に、哲學は、科學に比して、一層實踐的・情意的・超合理的の學であり、隨つて、全體學ではあるが、全體其のものではなくて、いはば「非合理の合理化」又は「體驗の論理化」であるが故に、結局、人生又は文化の一部分に過ぎない點に於て、哲學は、特に宗教と藝術とに密接な關係がある。卽ち、宗教も藝術も、人生又は實在の價値的方面を對象とする點に於て、哲學と近似する。併しながら、哲學は學であり知識であるのに對し、宗教も藝術も、學でも知識でもなくて、信仰であり觀照である點に於て、兩者は其の趣を異にする。そして、宗教及び藝術に關係の深い哲學の分野は、形而上學である。

(五) 哲學と教育。 教育も、亦哲學と密接な關係がある。卽ち、哲學も教育も、等しく全體及び價値としての人生を對象とする點に於ては揆を一にするが、而も哲學は、主として目的理想の方面を對象とするに對し、教育は、主として方法手段の方面を對象とする點に於て、兩者は寧ろ反極的にして、補合的な關係を有するものである。

第三節　哲學の內容

(一) **意義**。哲學は、全體的自覺の學であるが故に、其の對象卽ち問題も亦無限である。

(二) **內容**。哲學の問題を別つて主觀的及び客觀的とする。前者は、自覺の主體又は動力卽ち自覺性・理性乃至能知の方面で、所謂知識問題であり、そしてこれを取扱ふ哲學の分野は認識論(Epistemology)である。後者は、自覺の客體卽ち、狹義の實在乃至自覺內容所知の方面で、所謂實在問題であり、そしてこれを取扱ふ哲學の分野は、形而上學(Metaphysics)である。

然るに、實在問題は哲學の主體卽ち人間に對する關係上、人生問題・人間問題又は價値問題と宇宙問題・世界問題又は存在問題とに別れ、自ら形而上學も亦人生觀・人間觀・價値論と宇宙觀・世界觀・存在論とに別れる。

そしてこれを發生的見地から見れば、略、宇宙問題・人生問題・認識問題の順序で、哲學の問題及び哲學の分野が現れて來たのである。この點から見れば、ヴィンデルバント(Windelband)が、古代希臘哲學の中心を自然[illegible]し、古代末期の哲學の中心を處世術又は人生學とし、中世期の哲學の[illegible]を宗教哲學とし、近世初期の哲學の中心を世間智とし、カント哲學の[illegible]を知識哲學としたのは、大體に於て妥當である。

第四節　哲學の方法

(一) **意義。** 學は凡て方法的知識であるが、哲學は、科學に比して研究法を一層重視しなくてはならない。哲學が科學と異るのは、其の素材ではなくて寧ろ其の方法であると共に、「哲學の方法の闡明は哲學理說の一要素」(ヴント)だからである。卽ち、哲學が本質の學であるとか、全體的自覺の學であるとか、根本原理の學であるとかいふことは、畢竟、最も完全な研究法を必要とする學だといふことだからである。

(二) **種類。** 哲學の方法には種々の意義及び種類がある。

(1) 廣義の方法は、內的方法又は態度、卽ち哲學を研究し創建する際の心構へと、外的方法卽ち廣義の研究法とを包含するものである。

(2) 狹義の方法は、廣義の研究法卽ち旣存の哲學を理解する方法(と新哲學を創建する方法とを包含するもの)である。

(3) 最狹義の方法は、新哲學を創建する方法である。

(三) **順序。** 哲學研究法活用の先後は、態度・研究法・創建法の順序に從ふべきである。

第一項　哲學の態度

(一) **意義。** 哲學の態度は、哲學を理解し創建する際の心構へである。

(二) **種類。** 哲學の態度は、獨斷的・懷疑的・批判的の三つに大別することが出來る。

(1) 獨斷的態度は、哲學を研究することなしに、其の價値を肯定し(肯定的・獨斷的態度)又は否定する(否定的・獨斷的態度)ものであるが故に、哲學の態度としては採るべからざるものである。

(2) 懷疑的態度は、哲學を研究することなしに、其の價値を疑ふ態度で

あるが、輕々しく哲學の價値を肯定も否定もしない點は、批判的態度に近く、疑ふこと其のことを疑はない點は、獨斷的である。

(3) 批判的態度は、哲學を研究した上で其の價値を決定しようとする態度であるが故に、いはば懷疑的態度の洗練されたもので、最も健全な態度である。

(三) **正しき態度。** これを要するに、獨斷的態度からは、哲學の研究に、正しい信念の必要なことを學び、懷疑的態度からは、考へるだけ考へること、即ち、徹底的根本的思索又は研究の態度を學び、斯くして、採るべきは採り捨つべきは捨つる批判的態度を涵養し活用するやうにしなくてはならない。

第二項　哲學の研究法

(一) **意義。** 狹義の哲學の研究法は、既存の哲學を理解する方法である、

(二) **種類。** 狹義の研究法には、歷史的方法と論理的方法との二種がある。

(1) 歷史的方法は、哲學發達の跡を辿ることによつて、進步的知識としての哲學を理解する方法で、これに該當するものは哲學史である。

(2) 論理的方法は、哲學一般を論理的に研究することによつて、系統的知識としての哲學を理解する方法で、これに相應するものは、哲學概論である。

(三) **順序。** 哲學が、系統的にして進步的な學問であるかぎり、この二つの方法は併用されなくてはならない。そして、論理的方法から歷史的方法に及ぶと共に、前者が主となるべきものである。但し、先づ哲學概論から入り、次に哲學史を一通り理解したならば、論理的方法と歷史的方法とを併用して、一層精到な知識を獲得するやうにしなくてはならない。斯して、哲學の研究が次第に進步し、おのづから批判力も一通り發達する

時には、哲學的創造性が漸を逐うて次第に發動し、やがて獨自の哲學を創建しようとする要求が擡頭するやうになるのである。そしてこの要求を事實化するに必要な方法は、やがて創建法である。

第三項　哲學の創建法

(一)　意義。　哲學の創建法は、一言に、全我的方法又は觀明法である。即ち、直觀的體驗的方法に卽する論理的批判的方法である。直觀的體驗的方法は、主として、哲學の情意的方面、卽ち、形而上學的方面の研究に恰適するものであり、論理的批判的方法は、主として、哲學の知的方面卽ち認識論的方面の研究に該當する方法である。但し、これは、勿論、便宜的區分で、實際に於ては、相互表裏呼應して理性の全體的發動をはかるものである。若し、これに反して、一方のみを偏重する時には、不完全な哲學しか創建されないのである。

事實、東洋哲學は概して前者を偏重し、西洋哲學は概して後者を偏重してゐるのである。そして兩方法を併用するに必要なものは、解釋學的方法及び辨證法の活用である。蓋し、解釋學的方法は直觀體驗を論理化する方法であり、辨證法は矛盾對立を綜合統一することによつて新しい理論を構成する方法だからである。

(二)　日本哲學の創建法。　序に一言すべきは、日本哲學の創建法についてである。思ふに、これまで、我が國に於て「哲學」といふ時には、主として西洋哲學を意味してゐた。そしてこれは、大體に於て、西洋の文化が日本の文化よりも進んでゐたばかりでなく、哲學も亦西洋哲學の方が、哲學を一通り研究する上にも一般の學問を研究する上にも、等しく便宜であつた在來に於ては、止むを得ないことであつたが、今日、殊に今後に於ては謬見である。東洋哲學も亦西洋哲學と同樣の價値を有するばかりでなく、將來の日本にとつて眞に哲學に價するものは、十分な意味の日本哲學でな

くてはならないからである。

斯くいへば、過去の日本には日本哲學が存在しなかつたやうに聞えるが、決してさういふ意味ではなくて、畢竟するに、在來の日本哲學は、あつたにはあつたが、未だ十分な發達を見ず、隨つて、東洋哲學、詳くは、印度哲學・支那哲學及び西洋哲學に一段劣つてゐたといふのみである。勿論、今日と雖も、日本哲學は、未だ甚だしく幼稚であるが、一日も速にこの境地を超克し、日本哲學をして眞に獨自にして優秀な哲學たらしめなくてはならない。そしてそれがためには、一方、日本人及び日本文化の本質を闡明すると共に、他方、西洋哲學及び東洋哲學を研究し、且其等の長所を活用することによつて、在來の日本哲學を十分に發展させるやうにしなくてはならない。即ち、西洋哲學の長所たる論理的・主知的・形式的・體系的・認識論的方面と、印度哲學の長所たる信仰的・宗教的・體驗的・論理的・主知的・主情的・人生觀的・世界觀的方面と、支那哲學の長所たる實行的・倫理的・政治的・主情意的・直觀的・人生觀的・世界觀的方面とを併せ活用することによつて、日本哲學本來の特色長所たる實行的・倫理的・藝術的・政治的・主心的・主情意的・直觀的・人生觀的・人本的・國民的方面を十分に發展させるやうにしなくてはならない。

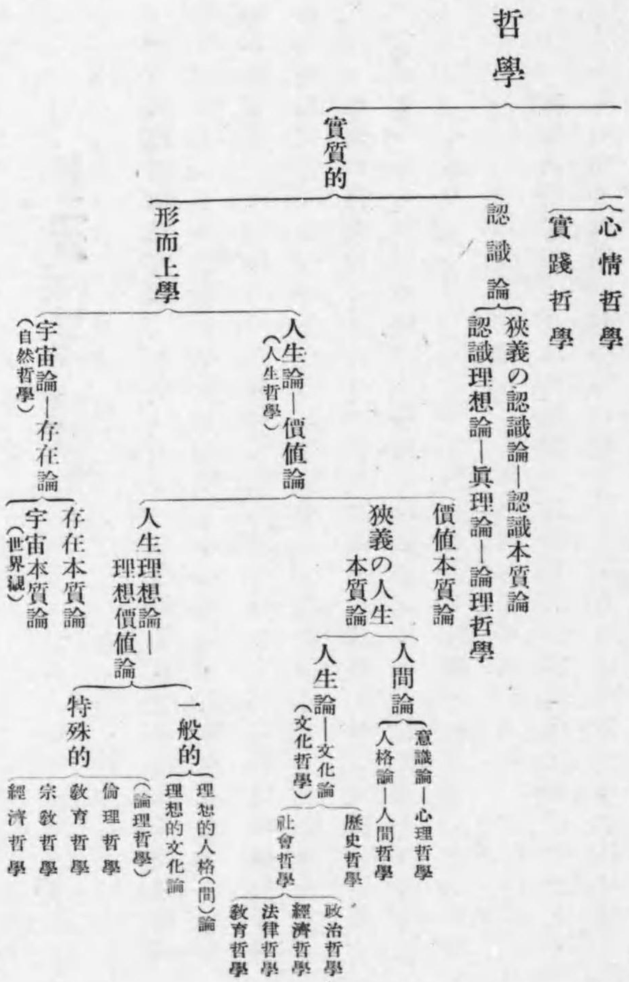
然るに、最近、哲學界全體の傾向が、頻に國民主義的・主情意主義的實行本位・人生觀本位・人間本位となりつゝあると共に、西洋哲學が東洋化しつつあるのは、日本哲學の本質的發展をはかるには洵に好都合である。但し、哲學は、其の本質に於て、普遍妥當的な合理的知識でなくてはならないから、將來の日本哲學も亦偏狹極端な國民主義又は實用主義に墮しないやうにしなくてはならない。

第五節　哲學の體系

(一) 意義。 哲學は、體系ではなくて方法であると見る學者もないではないが、これは寧ろ偏見で、哲學に體系が必要だとする方が妥當である。學が系統的であるばかりでなく、實在其のものも系統的であり、隨つて其の根源的認識は、體系を通じてのみ可能だからである。但し、哲學の體系は、何處までも、所謂「開かれた體系」でなくてはならない。

(二) 哲學の體系。 哲學には諸多の體系があるが、今左に、著者の體系を表示することとする。

- 一般哲學
- 特殊哲學
- 理論哲學（形式的）



第二章　哲學の價値

(一)　哲學價値否定論。　哲學は、上古から存續すると共に、凡ての文明國が所有することが證明するやうに、何等かの價値を具有するものであるにも係らず、世には、哲學の價値を否定するものも少くないが、理論的否定論と實際的否定論とが其の代表的なものである。

(1)　**理論的否定論。**　これは、哲學を理論上又は學として價値なしとするもの、卽ち、哲學の理論的價値を否定するものであり、且これには、更に、(イ)哲學を空漠とするもの、(ロ)哲學を科學と兩立しないとするもの、(ハ)哲學を變化常なしとするもの等の別がある。

(2)　**實際的否定論。**　これは、哲學を、實際上又は實生活上價値なしとするもの、卽ち、哲學の實際的價値を否定するものであり、且これには、

(イ)哲學を無用又は無力と見るもの、(ロ)有害(懷疑的悲觀的になるとか、理窟ぽく、議論好きになるとか、瞑想的・孤獨的・非實際的になるとか)と見るもの等の別がある。

(二)　否定論の批判。　これらの否定論は、哲學の陷り易き缺點、又は、不完全な哲學に伴ひがちな弱點に對する警告としては考慮に價するが、其れが極端に走り、あらゆる哲學を眞に否定しようとする時には謬見となるのである。哲學は、空漠でもなく、科學と兩立もし、其の變化は進步であり、更に、無用(力)でも有害でもないことは、事實の立證するところだからである。況んや、哲學の價値を眞に否定するには、價値及び否定に關する正しき理解を持たなくてならないのに、それは唯哲學に依つてのみ可能であるに於てをや。これ、「哲學は唯哲學によつてのみ否定し得る」といはれる所以である。實に、哲學の價値を否定するのは、眞に價値ある哲學を求めるためか、哲學に關する理解を缺くためか、又は、哲學の研究及び活用に

缺くるところがあるためかに他ならない。

(三) 哲學の價値。 然らば、抑も何が哲學の價値か。哲學の價値は、畢竟するに、自覺的存在としての人間又は人生の本質を闡明することに卽して、全實在の本質を闡明し、斯くして其の存在及び發展の一根本要素となり、其の一原動力となるところに存する。蓋し、全實在、卽ち、人生も人生以外の存在も、哲學を俟つてのみ、始めて十分な意味の存在、卽ち自覺的存在となることが出來るからである。

(四) 哲學の價値の二面。 これを詳言するに、哲學の價値は、理論的及び實際的の二面から考察することが出來る。

(1) **哲學の理論的價値。** これは、哲學の學問全體に於ける地位及びそれに對する使命である。別言すれば、哲學の學問としての價値で、學問としての資格の完否大小、學問體系上の地位、其の他の學問に依存する程度の如何、及び全體並に部分としての學問の成立乃至進步發達に對する貢獻の如何である。

そして哲學は、最も十分な意味に於ける獨立學であると共に、萬學の基礎學であるところに、其の理論的價値が存するのである。後文「認識論」に於て再述するやうに、哲學以外のあらゆる學問卽ち諸科學は、哲學を基礎としてのみ始めて嚴密な意味の學問の資格を具備することが出來るのに對し、哲學は、其の素材をこそ諸科學の供給に俟つが、其の學問的基礎は自己の力で構築するからである。そして哲學が最も十分な意味の獨立學であることは、哲學が最も舊い學問であると共に、諸科學は哲學から分離し發生したものであることに徵しても明らかであり、哲學が萬學の基礎學であることは、諸學に、例へば、政治哲學・經濟哲學の如く、哲學的方面が必須であることが立證するところであると共に、全學問の進步が哲學に俟つところが甚大であることを意味する。

(2) **哲學の實際的價値。** これは、哲學の學問以外の人生に於ける地位

及びそれに對する使命である。別言すれば、哲學を學んだものが實生活を營む上に享受する效益、又は、哲學の實生活に對する寄與貢獻である。そして、實生活も其の本質が自覺性に存するかぎり、哲學の實際的價値は極めて高大で、正しく實生活の最高指針であるといはなくてはならない。而も、哲學の實際的價値は、畢竟、所謂「無用の用」に存することを忘れてはならない。

但し、哲學は、學であり、學は實際の反省であり、指導原理であるかぎり、其の理論的價値が實際的價値より一段高大であることを忘れてはならない。實に、哲學の眞價は、其の效果を忘れて、眞理の探究其のものに全力を傾倒するところに存するといはなくてはならない。

卽ち、哲學は、(イ)哲學を學ぶものの哲學的精神を涵養助長することによつて、確乎たる信念、高邁な生活意志及び眞摯な生活態度を育成し、(ロ)哲學を學ぶものに哲學的知識、殊に人生又は人間就中學問や知識や眞理や價値等に關する正しき理解を與へることによつて、批判力や綜合力や向上心や普遍的永遠的精神等、價値ある生活を營む原動力を充實强化し、斯くして、個人と團體とを問はず、自覺的存在としての人間又は人生に最も高い意味に於ける「力」を與へるところに、哲學の實際的價値が存するのである。そしてこれは卓越せる哲人の生活及び社會の改造・革新乃至發展に對する哲學の寄與が雄辯に立證するところである。

斯くして、哲學は、何人にも又何時何處に於ても、必要であり有價値である。然るに、世には、哲學は、所謂哲學者をはじめ、特殊な教養を有し、特殊な職業に從事する、極めて少數の人々にのみ必要で、一般人には何等の價値もないかのやうに思ふものも少くないが、これは斷じて謬見である。但し、哲學の價値が所謂「無用の用」に存すると共に、哲學は、其の用語を見ただけでも明かなやうに、一般人にとつてはかなり難解であり、隨つて其の價値を十分に發揮活用するには、相當の努力を要することは、否み難き事實

であるが、而も、難解な問題を不撓の努力によつて徹底的に解決し行く所に哲學の眞の趣があることも忘れてはならい。そして哲學を活用するには、自己の人格と生活と時代とに卽すべきであるが、而も何よりも先づ必要なのは、哲學を學ぶことであり、且哲學を有效に學ぶには、哲學に對する先入見や誤解を一掃し、虛心坦懷、謙虛にして眞摯な態度を以て、健全優秀な哲學に就くと共に、自ら深く明かに考へることが必要である。

第三章　哲學の定義

哲學は、實在の本質に關する全體的自覺の學である。詳しくは、自覺的存在たる人間の精髓卽ち自覺性又は廣義の理性を直接動力とし、理性其のものを始め全實在を素材とし、其の本質を對象とし、全我的方法又は觀明法、卽ち、直觀的體驗的方法に卽する批判的論理的方法を用ゐて創建した根本原理の學、卽ち、最高義の自覺體系又は最高義の人間學で、認識論と形而上學(人生觀及び世界觀)とを二大分野とし、最も十分な意味の獨立學にして基礎學であると共に、眞實在卽ち自覺的現象たる人生の動力・基礎・標的及び一根本要素となり、斯くして、學問全體及び人生全體の進步・發展に貢獻することを目的乃至使命とするものである。

第四章　人生論

第一節　人生論の意義

（一）**意義**。人生論は、人生又は人間の本質を闡明することを職能とする哲學の一分野で、廣義の價値論であり、時には、世界觀と同一視されることもある。

然るに、哲學は、畢竟するに、人生學又は人間學であるかぎり、人生論の哲學體系上に占める地位は極めて高い。卽ち、人生論は、哲學の精髓を形造るものである。併しながら、哲學は、他面に於て、學の學であるが故に、人生論と共に認識論が必要であるばかりでなく、更に、實在の學であるが故に、存在論・宇宙論又は世界觀も必要である。

（二）**方法**。斯くの如き意味に於ける人生論を研究し、創建するには、一方、在來の人生觀を批判的に檢討すると共に、他方、其の成果を素材とし、且これを自己の信念・要求及び思索によつて獨自の理論に構成するやうにしなくてはならない。

第二節　價値の本質

（一）**本質**。價値は、實在の典型たる人生の本質としての自覺性又は自己超越性の普遍的・超時間的方面で、其の內在的・時間的方面たる存在と表裏相卽すると共に、人格と文化とを二大內容又は二大分野とする人生の精髓、卽ち、其の理想・目的・規範・標準にして其の現實・方途・內容であり、且普遍化性又は普遍―個別性、乃至、客觀化性又は客觀―主觀性を本質とするものである。

（二）**種類**。價値には、諸多の種類があるが、積極的と消極的・本源的と派生的・目的的と手段的・理想的と現實的・絕對的と相對的・客觀的と主觀的・人格的と事物的・精神的（道德的・敎育的・宗敎的等）と物質的（肉體的・經濟的等）が、其の主要なものである。そしてこれらは、價値としては何れも同格であるが、人生に於ける地位及び使命から見て、其の間に序列の別を施すことは、必ずしも不當とすることが出來ない。そして、積極的・本源的・目的的・理想的・絕對的・客觀的・人格的・精神的價値の方が、消極的等の諸價値より一段高次であると見なくてはならない。

價値の本質が普遍―個別性又は客觀―主觀性であるが故に、其の精髓を成すものは道德的價値であり、其の代表的なものは、文化價値である。そして、文化價値は、價値の普遍的・成果的方面で藝術的・學問的・政治的・經濟的・法律的價値等であり、人格價値は價値の個別的・動力的方面である。

尙、道德的價値は、一般には人格價値の如くに思はれるが、實は、文化價値にして人格價値である共に、宗敎的價値は超文化價値であることを忘れてはならない。

（三）**價値的現象としての人生**。人生は、斯くの如き價値を內容とするもの、卽ち斯くの如き價値の創造を內容的意義とするものであり、隨つて、

文化―人格的現象であると共に、發展的現象である。但し、文化と人格との相卽は、人生の本質であるが實際は必ずしもさうではなくて、兩者の間に矛盾を生ずることもあると共に、人間の生活には、一見無價値と見えるものも少くないが、嚴正に檢討すれば絶對的に無價値な人間生活といふものはないのである。

第三節　人生觀の種類

(一) **序**。數多い人生觀を、先づ、方法上のものと理說上のものとに二大別する。方法上の人生觀は、人生觀樹立の方法上の差異による區別であり、理說上の人生觀は、人生觀の內容の相違に從ふ分類である。

(二) 然るに、(甲)方法上の人生觀は、更に、非學的のものと學的のものとに別つことが出來る。

(1) 非學的人生觀は、人生觀の樹立及び表現の方法が學的でないものであり、そしてこれは更に、常識的・藝術的・宗教的に三分することが出來る。

(イ) 常識的人生觀は、經驗の結果として不知不識の間に出來上つた人生觀で、一般人の懷抱する人生觀の大半はこれに屬する。例へ

ば、幸福の增進が人生の目的だとか、樂あれば苦あるのが人生だとか、老少不常が人生だとかいふが如き、卽ちこれである。

(ロ) 藝術的人生觀は、感情を直接乃至主要動力とし、觀照と直觀とによつて感得した人生に關する理解を藝術的形式で表現した人生觀である。ゴェーテの『ファウスト』やシェークスピアの『ハムレット』の如きは、其の代表的なものである。

(ハ) 宗教的人生觀は、信仰中心の人生觀、卽ち、絕對的存在の確信の上に立てられた人生觀で、例へば、釋迦の悲觀的人生觀や日蓮の奮鬪的人生觀や基督の靈的人生觀の如きである。

(2) 學的人生觀は、人生觀の樹立及び表現の方法が學的なもので、これは更に、科學的なものと哲學的なものとに別れる。

(イ) 科學的人生觀は、科學的方法によつて樹立し表現された人生觀であり、隨つて、人生の事實觀又は現實觀である。例へば、ダーヴィンの進化論的人生觀や犯罪論者の退化的人生觀の如きである。

(ロ) 哲學的人生觀は、哲學的方法によつて樹立し表現された人生の本質觀、卽ち明確な根本原理によつて統一された人生觀である。例へば、ショーペンハウエルやニイチェやベルグソンやハイデッガーやヤスパース等の人生觀の如きである。

(三) (乙)理說上の人生觀は、更に態度と內容とに別つことが出來る。

(1) 態度から見た人生觀は、人生に對する態度の相違、卽ち、人生を價値あるものと見るか否かによる人生觀の區別である。そして、これは更に、懷疑觀、否定觀、肯定觀に別れる。

(イ) 懷疑觀(Scepticism)。懷疑觀又は懷疑的人生觀は、人生は果して生活に價するか否かが不明だとする人生觀で、否定觀肯定觀分離對立前の人生觀である。

(ロ) 否定觀。否定的人生觀又は厭世觀は、人生を生活するに價しな

いと見るものであるが、これは更に、(い)極端なもの、卽ち、人生を積極的に否定し、死―自殺を以て唯一最善の途と見るものと、(ろ)穩和なもの、卽ち、人生を生活に價しないもの、又は、惡(醜苦)と見ながら、必ずしも積極的にこれを否定しようとはせず、消極的な態度、卽ち、無爲に且いやいや生を續けることを以てこれに對するものとに別れる。

(八) 肯定觀。肯定的人生觀又は樂天觀は、人生を生活に價するものと見、隨つて喜んで生活するものであるが、これは更に、(い)與へられた儘の生活を直ちに價値ありと見るもの、卽ち、文字通りの樂天觀と、(ろ)與へられた生活は、本質としては價値があるが、而も事實としては不完全であるから、これを改善しなくてはならないと見る改善觀と、(は)人生は出來合のものではなくて創造すべきものであり、且この創造すべきもの、卽ち、あるべきものとしての人生を肯定する創造觀との別がある。

(2) 內容から見た人生觀は、人生を生活に價すると見る理由根據が何處にあるか、卽ち、人生の價値內容が何であるかに關する觀方の相違に從ふ人生觀の區別で、人生主義と非人生主義、個別主義と普遍主義、現實主義と理想主義、唯物主義と唯心主義が其の代表的な種別である。

(イ) 人生主義(Humanism)は、人生を、其自身獨立の價値を有し、且全實在中最も優れたものと見ると共に、人生が其自身獨立の價値があるのは、自覺的なためだとするものである

(ロ) 非人生主義は、人生の獨立性を認めず、何等か一層大きなものの一部分又は一層高いものの手段乃至前程と見るもので、これには更に、(い)自然主義、卽ち、人生を自然の一部分と見るものと、(ろ)超人生主義、卽ち、人生を實在の單なる一部分、又は、神靈界、天上界への單な

る手段乃至前提と見るものとの別がある。

(イ) 個別主義(Individualism)は、人生の本質を個別性にあると見る人生觀であるが、個別性の解釋の差に順じて、更に主我主義・獨善主義・利己主義・個性主義等に別れる。

(ロ) 普遍主義(Universalism)は、人生の本質を普遍性にあると見る人生觀であるが、普遍性の解釋の差に順じて、更に、人格主義・利他主義・家(血)族主義・社會主義・國家主義・民族主義・人類(人道・世界・國際)主義等に別れる。

(ホ) 現實主義(Realism)(又は刹那主義)は、人生の本質を現實(又は刹那)にあると見る人生觀で、保守主義・無爲主義・享樂主義・消費主義・便宜主義等が、其の內容である。

(ヘ) 理想主義(Idealism)(又は永遠主義)は、人生の本質を理想(又は永遠)にあると見る人生觀で、進步主義・將來主義・奮鬪主義・克己主義・生產主義・責任主義等が、其の內容である。

(ト) 唯物主義(Materialism)は、人生の本質を物質と見る人生觀で、物質の解釋の差によつて、更に、肉體(感覺)的と經濟的とに別れる。

(チ) 唯心主義(Spiritualism)は、人生の本質を精神と見る人生觀で、精神の解釋に順じて、更に、道德的・藝術的・宗教的・學術的等に別れる。

第四節　人生觀の批評

(一)　方法上の人生觀の批評。　第一に、方法上の人生觀について見るに、何れも、それぞれの價値を有してゐると共に、一面觀たるの缺點がある。嚴密な意味の人生觀は、人生の現實面と理想面とを包括すべきものであると共に、後者を主とすべきものであり、且其の方法は、體驗と論理とを併せ活用した生ける體系でなくてはならないのに、上記の諸人生觀は、何れもこの條件を完備してゐないからである。

事實、非學的人生觀は、體驗を主要方法とする點に於ては優つてゐるが、論理と體系とを缺くのが弱點である。これに對して、學的人生觀は、論理的體系的である點に長所があるが、體驗に裏付けられてゐない點に短所がある。更に、常識觀や藝術觀や科學觀は、現實觀に傾き、宗教觀や哲學觀

は、理想觀に偏しがちな點に於て、其の揆を一にする。

更に、これを細論すれば、(1) 常識的人生觀は、低級な人生觀であるにも係らず、これを捧持するものが非常に多く、(2) 藝術的人生觀は、兎角極端に流れがちであるにも係らず、其の捧持者は前者に次いで多く、而も感情的であるだけ其の影響が強く、殊に、婦人や青年や感情家に於て著しい。

(3) 科學的人生觀は、人生の現實を主要對象とするがために、兎角人生を貶視しがちであり、(4) 宗教的人生觀は、最も有力な人生觀ではあるが、而も極端に流れ易く、且何れかといへば、理想に偏するか或は暗黑面に傾くが故に、人生を悲觀しがちである。(5) 哲學的人生觀は、大體最も妥當な人生觀であるが、只其の原理が高遠深邃であり抽象的であるために、俗耳に入り難き虞がある。

斯くして、方法から見て眞に妥當な人生觀は、これらの諸人生觀を包括し綜合統一したものでなくてはならない。即ち、一方、常識觀や藝術觀や

科學觀を綜合統一して人生の事實觀・現實觀を構成し、他方、哲學觀や宗教觀を綜合統一して、人生の本質觀・理想觀を構成し、更に、後者を主とし、前者を統一してのみ、始めて眞に妥當な人生觀が成立するのである。

(二) 態度上の人生觀の批評。 第二に、態度上の人生觀について見るに人生觀の使命が人生肯定の基礎を確立することに存するかぎり、肯定觀が最も妥當な人生觀であることは、改めていふまでもない。

但し、妥當な人生觀が肯定觀でなくてならないといふことは、凡ての肯定觀が同樣に價値ある人生觀だといふことでも、懷疑觀や否定觀には何等の價値がないといふことでもない。否、眞の肯定は懷疑と否定とを不可缺の要因乃至條件とするものであるかぎり、懷疑觀及び否定觀にも相當の價値があると共に、眞に妥當な肯定觀は、懷疑觀や否定觀と矛盾するものではなくて、これを包括し、これを內在的に超越するものでなくてはならない。

これを詳言するに、(1) 懷疑觀は、デカルト及びカントが力說し實行したやうに、輕々しく、卽ち、獨斷的に人生を肯定も否定もしないで、先づ其の根據條件を確定し、然る後に其の價値の有無を檢しようとする所に、其の特色が存する。併しながら、それは何處までも正しき判斷の前提であり、其の方法であり、隨つて、斷じて疑惑に止り徹してはならない。蓋し、疑惑は、判斷中止狀態、卽ち、眞僞又は價値の有無に對して確乎たる積極的判定を下さない、否、下し得ない狀態であり、隨つて、消極的にのみ、卽ち、方法的にのみ價値があるからである。そして、玆に、懷疑的人生觀の短所がある。

實に、懷疑觀は、不徹底であり、消極的であり、且自己撞着的である點に於て、未だ嚴密な意味の人生觀と稱することが出來ない。人生が生活に價するか否かを疑ふのは、人生の價値肯定に對する要求が心の衷奥に動いてゐる證據である點に於て肯定的であり、隨つて、否定的にして肯定的なのが懷疑觀だからである。況んや、懷疑觀は、人生には價値があるかない

か判らないとしながら、判らないことが判るとしてゐる點に示唆されてゐるやうに、これを徹底すれば、疑ふこと其のことを疑ふべきであり、隨つて、何等の斷定も下し得なくなるに於てをや。

要するに、懷疑觀は嚴密な意味の人生觀としては支持し得ないのである。

(2) 否定觀は、懷疑觀に比すれば、徹底的ではあるが、而もそれ以上消極的であり自己撞着的である點に於て、一層不完全な人生觀であり、隨つて、長所と見るべきものが殆んどない程である。少くとも、極端な否定觀に於てさうである。人生觀の意義も價値も、人生肯定の根據となる所にあるのに、否定觀はこれに反するからである。世には「死のための人生」などといふものもないではないが、これは、嚴密な意味の人生觀ではなくて、寧ろ實在觀である。事實、眞に人生の價値を否定するものにとつては、人生がなく、隨つて人生觀もあり得ないのである。倒まにいへば、生きてゐるかぎり、縱ひ人生否定觀を提稱したり懷抱したりしても、未だ眞の否定觀には到達しないのである。

否、たとひ眞に人生を生活するに價しないとして自殺を決行するやうな場合に於てだに、其の自殺が否定的人生觀に從つての自殺、卽ち自覺的の自殺であるかぎり、自殺者の心の裏奥には、必ず何等かの意味又は方法で人生の價値を肯定しようとする要求、卽ち、よりよき人生への要望を懷抱してゐるのである。實に、自殺者の大部分は、沒自覺的に、又よい加減に生きてゐるよりも、遙かに眞劍な人生愛を有するものである。隨つて、態度から見た自殺者の缺點は、唯この人生愛を積極的に又は內容的に具現し得ない弱さにのみ存する。

勿論、實際の自殺には諸多の種類があるために、一概に評價し去ることは出來ない。そして自殺の評價を誤らないためには、凡ての行爲同樣其の動機及び結果の兩面から見なくてはならない。卽ち、(A)其の動機に於

ては、先づ(イ)人生全體又は人生其のものの價値を否定するのか、但しは、自己の生命や生活の價値のみを否定するのか、次に、(ロ)死―自殺後のことに關して何等かの考慮を拂つての自殺か、但しは、單に過去又は現在の苦惱や艱難を脱れんがための自殺か、次に、(ハ)自己一身のことのみを考慮しての自殺か、それとも、他人―家族・社會・國家・人類のことを考慮しての自殺か等を檢討すべきであり、(B)其の結果に於ては、自殺が生殘よりも自殺者其のもの、及び他人―家族・社會・國家・人類の價値を增進したか、それとも、低減したかを考慮すべきである。そして是認さるべき自殺は、ひとり、其の動機に於て、將來本位であると共に社會的であり、其の結果に於て、價値增進的であるもののみである。即ち、生きてゐるよりも死ぬことが自己及び社會に益を多く與へるか、又は害を少く與へるかが明かな場合のみである。

然るに、斯くの如きは、實は、眞に生きるための自殺であるが故に、嚴密に云へば、文字通の自殺は、如何なるものも肯認されないのである。

自殺以外の否定觀は、表面、極端な否定觀のやうに思はれるが、實は大抵穩和な否定觀、即ち人生に不滿を懷きながら、ずるずると生氣も光彩もない生活を續けて行くといふ觀方になるのである。そしてこの觀方が極端な否定觀よりも一層弱い人間の人生觀であることは、改めていふまでもない。人生に對して眞に强く且眞劍な態度を取るものならば、生活に價しない人生は、斷然破壞するか、さもなければ、全力を盡してこれを改造するか、又は、一層優秀な人生を創造するかの何れかに出なくてはならないからである。

以上、要するに、懷疑觀も否定觀も、等しく不完全な人生觀である。隨つて、嚴密な意味で人生觀と稱し得るものは、肯定觀のみである。而も肯定觀には三種の別があるために、其の中の何れが最も妥當な人生觀であるかを檢討しなくてはならない。そして與へられたままの人生を直ちに

肯定することは、人生を非人生(自然)から區別する根據又は條件を蔑視排除することであるが故に、人生觀としては、未だ眞に優秀なものといふことが出來ない。斯くして、改造觀か創造觀かの何れかに就かなくてはならない。

然るに、改造と創造とは、全然別なものではなくて、畢竟、程度の差であり、且後者が前者よりも一層積極的であるのみである。

(三) 內容上の人生觀の批評。 第三に、內容上の人生觀について見よう。

(1) 人生主義と非人生主義とを比べて見るに、前者が後者に優つてゐる。人生の獨立性を確立することが正しき人生觀の最大條件であり、殊に、人生主義が、人生の內容的特質を自覺的なところにあるとし、且人生を、價値的には實在中最高のものとするのは、人生を自然及び神國から截然區別する所以だからである。

但し、眞に妥當な人生主義は、決して人生に自然的な要素や神的な部分が全然無いとするものではなくて、寧ろ人生は、自然的な境地から出發し又は自然を素材乃至機會とし、理性卽ち自覺によつて神的な境地まで向上するところに、否、自然生活との直接的綜合を、詳しくは、獸と神との相剋鬪爭を內容とすることによつて、自然とも神國とも異なつた其自身の獨自性を具備する中間帶又は辨證的現象であるとするものである。卽ち、人生は、性的生活又は肉體的物質的生活に始つて宗敎的生活に終り、本能に始つて信仰に終り、沒自覺的生活から出發して超自覺的生活に到る過程であると見るのが、人生主義の人生觀である。

(2) 個別主義と普遍主義とを比べて見るに、後者が前者に優つてゐる。個別主義は、人間が凡て個體であるかぎり、何人も容易く了解することの出來る人生觀であるが、而もこれは明かに抽象觀である。凡そ具象的なもの卽ち本當の存在は、個別卽普遍體だからである。事實、如何なる個別體と雖も、必ず他の個別體及び諸個別體を包括する普遍體を豫想して

のみ、認識も存在も可能である。況んや、嚴密な意味の人生に於ては、自覺も價値も客觀的なものであるかぎり、單に一個人のみの人生といふやうなものは、到底認識も存在も不可能であるに於てをや。否、たとひ、個別主義の人生觀が、假に大まかな意味で存在が可能だとしても、それは極めて偏狹・貧弱・低級な人生觀に止るのみである。

要するに、個別主義の人生觀は、正しき人生觀の出發點・過渡的段階又は一面に過ぎない。併しながら、人生が個別卽普遍體であるかぎり、個別主義的人生觀は、無下に排斥さるべきものではなくて、普遍主義的人生觀と綜合統一して正しき人生觀を構成すべきものである。

これに對し、普遍主義の人生觀は、其の極端なものは、個別主義同樣抽象的であるが、實存する普遍主義は、個別性を普遍性の內容とするが故に、個別主義に比して、少くとも一段眞實に近い人生觀である。そして數ある普遍主義中最も妥當なものは、個別主義に相卽するもの、卽ち、一方、多數の個別性を包含すると共に、他方、最高の普遍性の本質的要因となるものを原理とする普遍主義、卽ち、國家主義である。隨つて、普遍主義にして妥當な人生觀たらんとするには、必ず個別主義を自家藥籠中のものとしなくてはならない。

(3)　現實主義と理想主義とを比べて見るに、これ亦等しく一面的な人生觀であると共に、後者が幾分優つてゐるのは、個別主義と普遍主義との關係と同樣である。

凡そ世に最も確實なものは「現實」であり、そして現實主義の强みはやがて玆に存する。唯、問題は、現實の意味の如何にある。若しも現實が、低級な現實、主義の考へるやうな、目前を徂徠する沒價値的な一刹那一刹那を意味し、隨つて、過去も將來も顧慮せず、責任も義務も理想も努力も發奮も精進も歷史も社會も蔑視して、偏に文字通の刹那的滿足や感覺的享樂を以て人生の本質とするならば、斯くの如き人生觀は到底支持し難い。斯

かる生活には、特に「人」生と稱するに足るもの、卽ち、動物生活又は自然生活と異る何ものもあり得ないからである。況んや、文字通の現實、卽ち過去にも將來にも何等の關係がなく、隨つて、寸毫も永續性又は內容性のない、いはば幾何學的點の如き現實は、斷じて確實な存在ではなくて、抽象的・假定的な存在であるに於てをや。

事實、實際の現實主義は、必ず何等かの永續性・內容性を具有する現實を原理としてゐるのである。少くともさうでないかぎり、現實主義は成り立たないのである。現實主義の標語たる「刹那の滿足充實」といふことは、過去に於ける、又は、過去からの要望が實現されたことか、現在の要望が將來に於て實現されることか、乃至は、過去の要望の實現に伴ふ滿足を幾分でも長く將來に持續せんとすることかだからである。

但し、これは、勿論、現實主義が無價値だといふことでないばかりか、寧ろ正しき意味の現實主義こそ眞に妥當な人生觀だといふことであると共に、唯正しき意味の現實主義の原理たる現實は、文字通の刹那ではなくして、過去と將來とを荷孕する永遠的現在だといふことである。

これに對し、理想主義は、人生觀成立の主要條件卽ち價値ある生活を營みたい、又は、人生や人間の價値を高めたいといふ動機と、將來卽ち人生の目的性・課題性・永續性と人間の自律性及び努力奮鬪の價値卽ち創造力・改造力又は人生の發展性とに對する確信を基礎とし、斯くして、人生を非人生―自然から區別して、其の獨立と卓越とを可能ならしめるところに、其の長所が存する。そして、理想主義は、人生の價値を將來又は超時間界に求めるものであるが故に、當然、永遠主義であると共に、理想はあるべきものであり、且實現されてのみ始めて其の意義が充實するものであるが、而も理想の實現は努力を必須條件とするものであり、更に、理想の實現は一段高大な理想の樹立を意味するが故に、當然、創造主義・改造主義・努力主義奮鬪主義・向上主義である。

但し、理想主義をして斯くの如き健全なものたらしめるには、必ず前記の現實を活用するやうにしなくてはならない。然らずば、理想は本來現實性卽ち實現の可能性と實現の必然性とを不可缺的條件とするものであるかぎり、無力貧寒な高踏主義・逃避主義・超越的二元主義・將來主義・空想主義・感傷主義・無爲主義に墮するからである。事實、健全な理想主義程、理想の樹立に際して現實を顧慮すると共に、理想實現の方途に對して周匝な考察を運らすものであり、倒に、人生の現實に對する豐かな理解を持つもののみ、健全な理想主義者となり得るのである。

要するに、現實と理想又は刹那と永遠とは、具象的人生の不可缺的な要素又は方面であるが故に、眞に健全な人生觀は、この兩面を包括し統一するものでなくてはならないが、而も價値的には、理想永遠が一段高次であることを忘れてはならない。

(4)　唯物主義と唯心主義とを比べて見るに、これまた略前二項の如く、唯心論が幾分優つてゐる。

唯物論は、極めて了解し易く、入り易い人生觀である。少くとも、幼稚低級な人間、卽ち自覺の低暗な人間にとつては、最も理解し易く又最も都合のよい人生觀である。物―物質や身體は、如何程幼稚な人間にも容易く認識され、隨つて、其の價値を認識することも亦何人にも容易いことだからである。

併しながら、一歩を進めて考へると、「物がある」といふことも「物である」といふことも、心が認めることによつてのみ可能である。事實、一般に「物」と呼ばれるものは、(一)心の表現として、心と共に知られる身體、(二)心の配慮の對象たり心の手段たる道具、及び(三)單なる心の對象卽ち純粹の客體たる自然以外にはなく、そして、前二者は、心によつて認められる限りに於てのみ物であり、隨つて純粹の物でないことはいふまでもないが、自然さへ、カントがいつたやうに、認識主觀卽ち心が法則を附與したもの、又はハイデ

ッガーの所謂心の缺如的狀態―不完全體に過ぎないのである。而も、嚴密な意味の存在は、自分で自己を現はにすること卽ち自己了解又は自覺であるかぎり、物は嚴密な意味の存在ではなく、殊に、純粹の物といふが如きは、人間が、何の用に立つかといふ見地から、有用性を抽象したものに他ならないのである。

要するに、物は、無自覺的存在で、單に空間を占めるといふ意味では、卽ち量的には存在するが、存在するといふことも、物であるといふことも、自己をどう取扱ふべきかといふことも、知らず、又單に機械的・因果的に連續するといふ意味では運動し變化するが、自己が變化するといふことも、變化があるといふことも、變化が何であり、且變化に對してどういふ態度や處置を取るべきかといふことも知らない存在である。隨つて、斯くの如き物には、獨立性がないと共に、價値の高下を決定する根據もないのである。人生の獨立性を確保し其の基礎を確立することを最高使命とする人生觀が、到底斯くの如き物を原理とすることによつて基礎づけられないことは、自明である。そして茲に、唯物主義的人生觀の缺點がある。

但し、これは、唯物主義の人生觀が全然誤謬無價値だといふことではない。要は、唯物主義の妥當し得るのは、自覺の低暗な人間や「如何にして生活するか」といふ人生の方途的第二義的方面、卽ち、人生の低級皮相な部分や方面に對してのみであると共に、唯物主義は、唯心主義を豫想し且これを根據としこれと補合してのみ可能だとするのみである。事實、唯物主義に、滿足するもの又は唯物主義を必要とするものは、單に生存するだけに滿足するもの、單なる奴隸や手段に甘んずるもの、目前の刹那的享樂に耽るもの、乃至、利己的なもの等ではないか。

唯心主義は、心を原理とするかぎり、人生の人生たる所以卽ち其の本質を闡明することによつて、其の獨立性に確乎たる根據を附與する點に於て、斷じて唯物主義に優つてゐる。卽ち、人生を自覺的なものと見るかぎ

り、必らず唯心主義に據らなくてはならない。

併しながら、唯心主義が文字通に「唯心」主義であつて、如何なる意味に於ても、物の存在及び價値を肯認しないやうなものであれば、それは、極端な唯物主義同樣、不完全である。心と言ひ物と稱するも、畢竟、眞人生、卽ち、自覺的自己超越的創造的生命の二面、詳しくは、心的方面は、其の第一義的―基礎的本源的高自覺的目的的理想的主體的方面であり、物的方面は、其の第二義的方面―枝葉的派生的低自覺的手段的現實的客體的方面ではあるが、而も何れも不可缺的なものであり、且この兩者は、大まかな意味で平行的相制的關係を有するものである。併しながら、人生が自覺性を根本特質とすると共に、自覺が物的方面を必須の條件としながら、而も其の本質が心的なものであり、且心的なものが物的なものを包含するかぎり、唯心主義が唯物主義よりも一層妥當な人生觀であるといはなくてはならない。

第五節　人生の本質

第一項　人生の定義

人生は、最も十分な意味の實在又は實在の典型である。自覺性を本質とし、創造性を精髓とし、辨證性を形態とし、價値性を內容とし、人格と文化(歷史と社會)とを二大分野とし、修養と活動とを二大過程とする人間生活である。

第二項　人生の本質―自覺としての人生

(一)　自覺。人生の本質は自覺性である。そして、自覺は、自己が自己に於て自己を超えることによつて自己を識ると共に自己を高めることである。詳しくは、自覺は、理性を直接動力とし、思惟と實行とにより、自己の存

在性・個別性の眞相を理解することに卽して、自己の價値性・普遍性の本質、卽ち、全人生又は世界に於ける自己の地位及びそれに對する使命、隨つて自己と他との關係を認識すると共に、それを高めるために、自己の使命を感得し、理想を揭樹し、目的を設定し、且これを遂果・實現・達成する方法・手段を考案・實行し、更に、斯くの如き心事・態度を以て他と協力・交渉することにより、人間全體又は人生全體を上記の如くならしめることである。隨つて自覺は自己超越であり、人生及び人間は自己超越體であるともいふことが出來る。

尙、自覺には、存在的と價値的・個別的と普遍的・受動的と發動的・觀想的と實行的又は反省的と躍進的等の別があるが、後者を主として前者を包んだものが、最も十分な意味の自覺である。

(二)　人生の本質。　思ふに、人間には諸多の特質があるが、「人間とは何か」と自ら問ひ、且これに對して自ら答へる所に、卽ち自覺的存在たるところに、其の根本特質が存する。人間が理性的存在だといはれるのも、やがてこれがためである。而も、人間は、單に人間は何であるかと、自ら問ひ、且自らこれに答へるばかりでなく、この答から更に問を生み、この問に又答へるといふ樣に、不斷に且永遠に問と答とを追求して行く點に於て、發展的・歷史的存在であると共に、人間以外のあらゆる存在が何であるかを自ら問ひ、且自らこれに答へることによつて、森羅萬象卽ち實在の本質を闡明する存在である點に於て、社會的存在であり、隨つて、人間は、正しく萬物の靈長であり、人生は眞に實在の典型であるといはなくてはならない。實在の本質を闡明することを任務とする哲學が、人間又は人生によつて如何に重要な意義を有するかは、おのづから明白であらう。

但し、玆にいふ自覺性、隨つて、問も答も、勿論、單なる知的自覺性ではなくて、全體的のもの、卽ち、知情意的なものであると共に、觀想的にして實行的、心的にして物的なものであることを忘れてはならない。

第三項　人生の精髄—創造としての人生

(一) **序**。自覺性を本質とする人生の精髄は、創造性である。自覺は發展であり、發展は創造だからである。

(二) **發展**。發展は、或るものに內在する本質が、時間の經過に連れて次第に十分に顯現し發揮されることであるが、これに三種の別がある。

(1) 廣義の發展は、自然的・必然的發展で、嚴密には、寧ろ變化と呼ぶべきものであり、且鑛物に該當するものである。

(2) 狹義の發展は、生物的・有機的・合目的的發展で、存在の各部分が全體の・目的を實現する條件となり、而もそれが單純な組織から複雜な組織へ、分化と統一との斷えざる過程によつて進み行くことで、嚴密には、寧ろ成長・發育又は進化と呼ぶべきものであり、且、動植物に該當するものである。

(3) 最狹義の發展は、精神的・人間的・自覺的發展で、時間的過程に於て、其の後段が前段に比し、一層高く且新しい價値を生み出すことで、これのみが、嚴密な意味の發展であると共に、其の精髄がやがて創造である。そして玆に、自覺としての人生の精髄が創造たる所以が存する。

(三) **創造**。創造は、新しい價値を生み出すことである。詳しくは、造られたものが、自己を否定して一層よいものを新たに造り、自己以外のものを造ることに卽して自己を造ることで、自己超越・否定に卽する肯定又は破壞に卽する建設である。隨つて、創造は、一面、過去から傳承したものを現在に於て變更して將來に傳へること、卽ち、造られたもの(過去)が造るもの(將來)を造る(現在)ことである點に於て、歷史的であると共に、他面、創造者の個的創造性は社會又は他から發達させられるばかりでなく、身體や物質や技術を通して客觀化し、且他人と協力して環境又は世界を形成するものである點に於て、社會的である。そして玆に、創造が、歷史的・社會的現

象としての人生の精髄たる所以がある。事實、人生は、唯創造によつてのみ、意義ある存續卽ち價値的高上又は發展が可能である。

(四) 創造としての人生。 人生の精髄が創造だといふことは、自覺的に價値を創造することによつて發展するのが人生だといふことである。事實、創造のない所に人生はない。少くとも、人間が、人生は、創造的なもの、卽ち、造られたものが造るのが、人生だと自覺し、創造しようと意志し、且その意志を實行しなければ成立しないのである。別言すれば、人生は、自己の力で成立するばかりでなく、自己の力で發展し、且常に一層高大な目的理想を追求し且これを實現達成して永遠に止ることがないものである。人生に於て、創造性に富むものが尊敬されると共に、要求・理想・努力・向上・改造・工夫・獨創・發明・發見・生產・制作・形成等が重視され、修養と活動とが人生の大部分を占めるのも、これがために他ならない。

斯くして、人生は、これを個別的方面から見れば、各人が、自己の本質及び人生に對する使命を理解し、且自己の長所卽ち創造性を十分に涵養・助長・發動・活用することによつて、獨自の價値を創造し、一方、人生に對する自己の使命を遂果し、人生に於て獨自の地位を獲得し、隨つて、生きることに滿足を覺え、他方、他人・社會・國家・人類に對して、卽ち文化の創造發展に對して出來るだけ多大の寄與貢献を致し、隨つて、生きることに光榮を感じ、且他と協力して、他をも自己同樣の生活を營ましめることによつて、人生共のもの又は人生全體の本質的發展を圖るところに、創造としての人生の眞義が存するのである。一言にすれば、生產・形成及び寄與が人生の本旨であり、且人格の創造に卽する文化の創造、卽ち、獨自にして優秀な創造性を具有する人格に成ることに卽して文化の創造發展に貢献すること、又は、文化の創造發展に貢献することに卽して獨自にして優秀な人格に成ることが、人生の目的である。但し、茲にいふ人格は國民的人格を典型とし、茲に云ふ文化は國家的文化を代表とすることは勿論である。

人生の目的が、斯くの如く創造であるかぎり、其の方途も亦これに順じて、創造を原理とするものでなくてはならない。

人生の方途は、態度と過程とに別れる。そして、(A)態度には、對己的のものと對他的のものとの別がある。(イ)對己的態度は、自己信愛と刹那惜用とを含み、(ロ)對他的態度は、寄與又は協力である。

然るに、協力は、對者との關係に順じて三種に別れる、(い)同等者に對する協力は[敬]であり、(は)低劣者に對する協力は[競]であり、(ろ)高優者に對する協力は[愛]である。競とは、共通目的の達成のために異つた方面から全力を出し合ふことであり、敬とは、高優者を尊び、これに從ひ、これを範として發奮し、遂に自ら高優者の地位に達することであり、愛とは、低劣者を悲しみ、それが在ることに責任を感じ、これを庇ひ、これを激勵し、やがてこれを彼自身の力で自己の地位まで向上させることである。

人生の過程には、修養と活動との別がある。そして、前者は、自己の長短の自覺と伸長補短とを含み、後者は長所の活用である。

第四項　人生の形態

(一) **辨證性**。人生の形態は辨證性である。辨證性とは、否定の否定に依る對立の直接的統一、矛盾の直接的綜合、乃至緊張鬪爭否定飛躍に依る發展の義である。

(二) **辨證性としての人生**。人生は、この意味の辨證的現象である。人生が表面矛盾だらけに見えるのは、これがためである。實に、人生は、(一)人生と非人生、神と動物、必然と自由、存在と價値、(二)生と死、建設と破壞、幸と不幸、(三)心と物、目的と手段、人格と道具、(四)個別と普遍、主觀と客觀、相對と絶對、(五)現實と理想、刹那と永遠、變化と恒常、(六)觀想と實行、等の對立又は矛盾を必須の條件とするものである。

併しながら、人生の人生たる所以は、これらの對立矛盾を對立矛盾の儘

に委ねないで、對立矛盾に卽して統一綜合することによつて、發展又は創造を可能ならしめる所に存する。そしてこの點から見れば、人生の形態が辨證的だといふことは、やがて人生が中間的狀態の超越だといふことであり、更に、人生は不安の克服だといふことである。

第五項　人生の內容及び分野

(一)　人生の內容。　人生の內容は價値性である。人生が自覺的創造的現象だといふことは、價値的現象、卽ち、價値を生み價値を高めることを內容とする現象だといふことである。事實、價値的自覺を持たないものは人間ではない。人間のみが人格であり、且修養(敎育を含む)を爲し得ると共に文化の創造者であり得るのは、けだし、これがためである。

(二)　人生の分野。　然るに、價値は、普遍的個別性であり、且それには、個別的方面と普遍的方面とが存するが故に、人生にも、これに順じて人格と文化との二面がある。卽ち、價値としての人生の個別的主觀的(主體的)動力的方面が人格であり、其の普遍的客觀的成果的方面が文化である。但し、この二面は、實際に於ては、離れ離れになつてゐるものではなくて、表裏相卽するものである。

尙、文化は、價値的現象であると共に、歷史的社會的現象であり、そして、其の典型は國家的文化である。人格が國家的人格、卽ち、國民としてのみ始めて眞に價値ある人格となり得るのも、亦これがために他ならない。

第六項　人生の過程

(一)　序。　人生には諸多の過程があるが、これを間接的段階と直接的段階とに二大別することが出來る。

(二)　人生の間接的段階。　これは、修養又は敎化の段階である。修養又は敎化とは、嚴密な意味の創造、卽ち客觀的創造を爲し得る程度まで創造

性を發達させる段階であり、且これは、幇助的のもの卽ち教育と、獨立的のもの卽ち自修とに別れる。

（三）**人生の直接的段階**。これは、活動又は實生活の段階で、嚴密な意味の創造、卽ち、眞善美といふやうな價値を直接に生み出す客觀的創造を直接使命とする段階である。

修養教化は、人生の前段的一面卽ち自覺性の內容的意義であり、實質的に人生を非人生から區別せしめると共に、修養教化の目的、又は結果としての修養教化を可能ならしめる根據となるところの活動實生活と表裏してのみ、價値を有するのである。實に、修養も活動も、教化も實生活も、等しく人生の本質的要因又は分野たる點に於ては、同位的であるが、而も、修養教化のための活動實生活ではなくて、活動實生活のための修養教化であると共に、活動實生活によつての修養教化ではなくて修養教化によつての活動實生活である點に於て、活動と修養又は實生活と教化とは、目的と手段又は後段と前段との關係に立つことは、否み難き事實である。そしてこの關係は、個別的人生に於て極めて明白に現はれてゐるところである。卽ち、普遍的人生又は社會生活に於ては、教化と實生活との關係は左程明白ではないが、個別的人生卽ち個人生活に於ては、修養は活動に先立つと共に活動は修養の目的となつてゐるのである。

但し、修養と活動との時間的關係、卽ち、先後關係は、單に一回限りではなくて、連環的辨證的乃至全生涯的である。修養は常に活動を目的として行はれると共に、活動は修養の成果である點に於て、別言すれば、修養の良否がやがて活動の優劣の原因であると共に、活動の優劣がやがて修養の良否の結果であるが故に、活動が論理的に先行しないところに修養のあり得る筈がなく、又修養が時間的に先行しないところに活動のあり得る筈もない。

尙、これを其の形態から見れば、修養教化は、人生の個別化的主觀化的現

象であり、動力面・間接面又は受動面であるのに對し、活動實生活は、人生の普遍化的・客觀化的現象であり、成果面・直接面又は發動面である。一言に、前者を人生の人格的方面と稱し得べくんば、後者は文化的方面と呼ぶことが出來る。

第五章　宇宙論

第一節　宇宙論の意義

宇宙論は、世界觀とも存在論とも又自然哲學とも呼ばれるが、これに廣狹二つの意義がある。

(1)廣義の宇宙論は、自然と人生とを併せ含めた全體としての實在の本質を明らかにするもので、形而上學と同義であり、(2)狹義の宇宙論は、人生と對立するもの、又は、人生以外の實在卽ち自然の本質を明らかにするもので、人生論と共に形而上學の一部分を構成するものであり、そして、人

生論を價値論と見れば、宇宙論は存在論といはなくてはならない。本章に於て論究する宇宙論は、勿論狹義のものであり、隨つて哲學全體に於ける地位も、形而上學に於ける地位も、人生論に比べては一段低く、且自然科學に密接な關係を有するものである。

第二節　宇宙論の種類

(一) **意義**。宇宙論は、斯くの如く、存在としての實在に關する考察であるが故に、人生論と異なり、理想的方面を缺き、狹義の本質的方面のみが研究の對象となるのである。生成問題・數量問題・性質問題が、卽ち、其の主要問題である。

(二) (1) **生成論**。これは、「宇宙は動的存在であるが、其の動的存在としての宇宙は、如何やうにして生成し存續するか」といふ問題に對する解答で、因果論・機械論・決定論・必然論と、目的論・自由論・意匠論・有極論とが、其の代表的見解である。

(イ)因果論・機械論・決定論・必然論は、因果、卽ち、等量等質的因果を以て宇宙生成の原理とし、隨つて、宇宙は、單なる機械的・決定的・必然的の存在で、

其の與へられた始めに於て動であるから、それを原因として永久に動いてゐるに過ぎず、隨つて、類似か反復かがあるだけで、何等の進歩も發展もないとするものである。

(ロ)目的論・自由論・意匠論・有極論は、目的、卽ち異質異量的因果を以て宇宙生成の原理とし、隨つて、宇宙は、何等かの目的を有し、この目的を達成するために斷えず活動し、おのづから宇宙生成存在の原因は、それに先立つと共にそれの進み行く彼方に何時も存在するものであり、斯くして、宇宙は、單なる所與でも動でもなく、合目的的な活動、卽ち不斷の進歩發展であり、自由創造であると見るものである。

以上の二見解は、それぞれ一長一短を有するが、後者が一段優り、且結局に於て後者を主とする。卽ち、宇宙は、大部分決定されてゐるが、而も將來は豫見し得ないと共に、豫見し得ない將來も一旦現前すると過去となつて將來を規定すると見る機械的目的論が一番妥當である。

(三)　(2)**數量論**。これは、「宇宙は本來幾何のものか」といふ問題に對する解答で、單元論・一元論・二元論及び多元論等の別があるが、結局、一元論及び多元論が、其の代表的見解である。

(イ)單元論は、宇宙を(多に對する)一と見るものであり、(ロ)一元論は、宇宙を(多を豫想しない)一卽ち全一と見るものであり、(ハ)二元論は、宇宙を二と見るものであり(これは、更に、二つのものの關係如何によつて、超越的二元論と內在的又は並行的二元論とに別つことが出來る。)(ニ)多元論は、宇宙を無數と見るものである。

これらの諸見解は、何れもそれぞれ一味の眞理を藏してはゐるが、而も亦何れもそれぞれ一面に偏してゐる。殊に一卽多の問題は一から多を說明することにも、多から一を解釋することにも等しく困難が伴ふが故に、最も妥當な宇宙數量論は、これらの諸見解の長所を打つて一丸としたものでなくてはならない。そしてこれに該當するものは、やがて多卽一

元論、卽ち、多は一の多であると共に、一は多の一であり、全體的一から個別的多へ、又個別的多から全體的一へと發展するといふ意味で、多と一との矛盾的自己同一が宇宙であるといふ觀方である。但し、斯くの如き一と多との關係は、最早單なる數量問題ではなくて、性質問題であることは、いふまでもない。

(四) (3) **性質論**。これは、〔宇宙の本質は何か〕といふ問題に對する解答で、唯物論唯心論・物心並行論が其の代表的見解である。

(イ)唯物論は、宇宙の本質を物卽ち無自覺的なものと見るもので、生成論に於ける因果論と表裏する見解である。但し、これには、物の解釋の如何によつて、元子論(Atomism)と物活論(Hylozoism)との別がある。元子論は、宇宙は、それ以上分割すべからざる元子(Atom)といふ極微部分から成り立つとし、物活論は、物質其のものに生命(活力)があるとする點に於ては異なるが、所謂心又は獨立の存在ではなくて物の一作用・一狀態に過ぎないとする點に於ては、二者其の揆を一にする。

(ロ)唯心論は、宇宙の本質を心卽ち自覺的なものと見るもので、生成論の目的論と呼應する見解である。但し、これも亦、心の解釋の相違に順じて、超越的唯心論と內在的唯心論又は合理的唯心論と非合理的唯心論等に別つことが出來るが、所謂物を獨立の存在と見ないで、心の一作用・一狀態と見る點に於ては、何れも符節を合する。

(ハ)物心並行論は、前記の二見解を折衷調和したもので、宇宙は、物でも心でもなく、宇宙の一面が物的、他面が心的であり、而も、此の兩面の關係は並行的で、物的方面は必ず心的方面に影響し、心的方面は必ず物的方面に交涉すると見るもの、卽ち、物心兩者を獨立的存在と見ず、宇宙の不可缺的不可離的な作用・方面又は屬性と見るものである。

以上の三見解は、何れもそれぞれ一長一短を有するが、並行論が最も缺陷が少い。只、この見解の重要難點は、物的方面と心的方面とを文字通に

並行的に見ることである。尙、唯物論は、簡明精確ではあるが、而も最も難點が多く嚴密には宇宙の數量的方面を說明し得るだけである。但し、唯物論を道德に害があるとするが如きは、宇宙論としては不當である。

第三節　宇宙の本質

（一）**宇宙の本質**。宇宙の本質は、自己超越性である。自己超越性とは存在の根據を自己自身の中に具有すると共に、自己の力で自己を斷えずよりよくすることで、時間に於て最も十分に具現するものである。

（二）**自己超越的存在としての宇宙**。自己超越的存在としての宇宙は、目的的自由的なものであり、一卽多的であり、心物的である。

但し、宇宙が目的的だといふことは、必ずしも一定の質的目的を有してゐるといふことではなくて、發展的だといふことであり、自由的だといふことは、因果律に從はないといふことではなくて、異質的流續體卽ち創造體だといふことである。一卽多的だといふことは、多が何處までも多となり、個と個とが何處までも相互に限定し得ることが一となることであ

るといふ意味で、個別卽普遍體・時間卽空間體又は關聯體・統一體だといふこと、卽ち、普遍的方面に於ては一であり、個別的方面に於ては多であり、隨つて、宇宙には、眞に孤立するものが一つもなく、皆相互に、時間的空間的關係をはじめ、何等かの關聯を有するといふことであると共に、宇宙の本質が創造的だといふことである。心物的だといふことは、心的方面と物的方面とが文字通に並行することではなくて、心的方面が、宇宙の目的的方面に該當し、物的方面が其の手段の方面に相應し、隨つて、前者は後者よりも高次な地位を占めると共に、宇宙が發展するに從つて益々心的になるといふことである。

斯くの如き意味に於ける宇宙論は、勿論、人間の見た宇宙論であり、そして人間の力は有限であるが故に、其の本質を闡明し盡すことが出來ない。玆に、狹義の宇宙論の限界がある。卽ち、宇宙論は、結局、不可知論又は信仰に歸せざるを得なくなるのである。

第六章　認識論

第一節　認識論の意義

（一）**意義**。認識論(Epistemology, Erkenntnistheorie)とは、認識の本質を徹底的に論究することによつて、知識一般の根據を確立することを職能とする哲學の一分野である。

卽ち、認識とは如何なるものであり且如何なるものであるべきかといふこと、別言すれば、認識の可能性と妥當性とを明らかにすることによつて、哲學の論理的基礎を構成し、其の一大分野を完備すると共に、科學の根本假定を解明することによつて、これに確乎たる學的基礎を附與するものである。

認識論は、知識卽ち常識及び科學的知識を批判し、其の可能及び妥當の根據を明らかにするものである點から見て、知識の知識・知識學・知識哲學・知識批判・認識批判乃至科學批判等とも呼ばれ、又知識の理想を求める點に於て、眞理學又は眞理論などとも稱せられる。

尙、認識論は、哲學の分野中最も後れて成立し、嚴密にはロック(Locke)及びカント(Kant)の力によつて成立したものであり、隨つて其の名稱も十九世紀半頃(一八六二年に公にされたツェッラー(Zeller)の『認識論の意義及び課題に就いて』以後)に於て一般に使用されるやうになり、而も其の以後に於ても、これを論理學と呼ぶものが少くないが、勿論適當ではない。

(二) 價値。 認識論の哲學に於ける地位は極めて高い。哲學は、何よりも先づ學であり、そしてそれは、全體的にも部分的にも認識論の力に俟たなくてはならないからである。併しながら、これを以て哲學の中心精髓と見たり、認識論卽ち哲學と見たりするのは誤謬である。認識論は、畢竟、形而上學同樣、哲學の一分野に過ぎないばかりか、形而上學こそ寧ろ哲學の本部だからである。而も研究乃至創建の順序に於ては、認識論が最初に位すべきものである。認識論は、科學と形而上學との中間に位し、且兩者に學的基礎を附與することにより、其の異同を明かにし、隨つて、哲學をして嚴密な意味の學たらしめるものだからである。

第二節　認識論の分野

認識論は、其の使命に順じて、先づ二大分野に別たれる。(1)「認識とは何ぞや」といふ問に答へる方面、卽ち、認識の事實又は現實面を明かにする方面は、狹義の認識論又は認識本質(可能・要素・對象)論であり、(2)「認識は何であるべきか」又は「理想的認識卽ち眞理とは何ぞや」といふ問に答へる方面は、認識の理想論・眞理(の性質・動力・標準・價値・種類)論又は論理哲學であり、そして、前者が、其の主要部分を占めると共に、後者は、道德哲學・藝術哲學・宗教哲學等と共に、所謂特殊哲學の一種に屬する。尙、研究の順序も、狹義の認識論より眞理論に進むのが正當である。

第三節　認識の本質

認識の本質論は更に三つに別れる。(一)認識の可能論、(二)認識の要素論、(三)認識の對象論が、卽ちこれである。

第一項　認識の可能

(一)　**意義**。認識論の最初の問題は、認識可能の問題、卽ち「認識、詳しくは眞に價値ある、客觀的な、又は、普遍妥當的な認識は、可能であるか」といふ問題である。而もこの問題は、實は、認識論全體の問題である。認識論は、普遍妥當的な認識の本質を闡明することを職能とするものであり、そして普遍妥當的認識の本質を闡明する根據となるものは、その可能だからである。

併しながら、認識の可能といふことは、認識の可能といふことが普遍妥當性を持つてゐるといふことを假定してのみ肯定し得ることであるが故に、認識可能の問題は、結局、認識及び認識論の一問題に過ぎない。

(二)種類。認識の可能に對する解答に三種ある。獨斷論・懷疑論・批判論が卽ちこれである。

(1) **獨斷論**(Dogmatism)。これは、(イ)認識の本質を十分吟味することなしに普遍妥當的認識の可能を肯定するもの(肯定的獨斷論)、又は、(ロ)否定するもの(否定的獨斷論)である。

(2) **懷疑論**。これは、認識の可能不可能、隨つて普遍妥當的認識の有無に對して斷定を下さず、寧ろ認識の主觀性・相對性を力說するものであり、何れかと云へば、否定的獨斷論に近いものである。尙、認識問題に對し、完全確實な解決を斷念しながら、而も尙蓋然的解決を豫期するものは、廣義の懷疑論で、蓋然論(Probabilism)と呼ばれる。

(3) **批判論**(Criticism)。これは、認識の成立し作用する基礎條件を論究した上で、其の可能を肯定し、且其の可能の範圍を限定するもの、卽ち、認識又は普遍妥當的認識の可能・不可能を決定する前に、先づ認識力其のもの、卽ち、認識の原理・條件・限界等に對して愼重な分析吟味を施す立場である。

(四) **批判論の價値**。以上の中、批判論が最妥當である。前述の如く、認識論は、知識の知識を求めるものであるが故に、其の本質を論究することなしに、無下に其の可能を肯定したり否定したりすることは、この問題に對して正しい解答を與へる所以ではない。併しながら、認識の可能・不可能に對して一定の斷定を下さないといふことも亦誤謬である。何となれば、認識の可能・不可能に對して一定の斷定を下すことが出來ないとすることは、「疑ふことは問ふことであり、且問ふことは、この斷定が眞か、反對の斷定が眞かといふこと、卽ち、何れにせよ、一が眞でなければならないことを假定する」といふリッケルト(Rickert)の語を如く、認識の可能を消極

的に肯定する意味の斷定を下したものだからである。これ、批判論の正しい所以である。そして、批判論は、カントの取つた立脚地であるがために、カントは認識論の確立者であるといはれる。尙、カントは、獨斷論を專制政體に擬し、懷疑論を無政府にたとへてゐると共に、自己の哲學を「批判哲學」と呼び、それ以前の哲學を「獨斷哲學」と稱した。

但し、批判論は、徹頭徹尾前記の兩立脚地と異るものではなくて、寧ろこれらを折衷統一したものである。即ち、先づ認識の可能を疑ふ點に於て懷疑論に近似し、次に、認識の範圍を經驗分內に限る點に於て、否定的獨斷論と共通し、更に、認識及び普遍妥當的知識の可能を認識の根本假定として肯定する點に於て、肯定的獨斷論と符合する。

要するに、批判論は、認識卽ち普遍妥當的知識の可能を肯定するが、而も、其の認識又は知識は、單に經驗分內のもののみであると共に、斯かる認識や知識を可能ならしめる條件、卽ち、認識の確實性及び必然性の基礎は、吾々が經驗に先立つて具有する主觀の形式に存するとした點に、其の特色が存するのである。

第二項　認識の要素

(一) **意義**。認識の要素論は、認識は如何にして成立するか、其の構成要素は何か、如何なる認識が眞に確實であるか、又は、確實なる認識が成立するには如何なる要素が必要か、といふ問に答へるもので、認識の起源論とも呼ばれ、畢竟するに、「認識の確實性」を明かにすることを中心として、認識の全體、卽ち、主觀―客觀關係、形式―內容關係及び眞―僞關係を一通明かにすることを使命とするものである。

(二) **種類**。認識の要素論に、理性論、經驗論、批判論の別がある。

(1) **理性論**(Rationalism)。これは、認識の根本要素は理性であり、理性は經驗に先立つて、卽ち先天的(a priori)に人間が生得本具するものであり、隨

つて、認識は、絶對に確實にして必然的なものであると共に、神・靈・本體といふやうな超經驗的なものをも認識することが出來るとするもので、又先天論(Apriorism)とも呼ばれ、論理學や數學や自然科學と、密接な關係を有する。

理性論者に從へば、感覺は斷えず變化するが故に、それによつて獲た知識卽ち感覺的知識は、單に其の感覺者に價値があるだけで、一般的卽ち普遍的價値がある譯ではなく、隨つて、感覺作用の刹那に價値があるだけで必然性がある譯でもないのである。然るに、理性は、本來普遍的であるから、これに依つて行つた認識は、確實性卽ち普遍性及び必然性を有するのである。

(2) **經驗論**(Empiricism)。これは、認識の根本要素は經驗で、一切の認識は經驗から生ずるとするものである。そして經驗は、感覺及び先天的ならざるものを意味するが故に、感覺論又は後天論(Aposteriorism)と呼ばれ、特に心理學・生理學及び生物學に俟つところが大であると共に、認識の起源問題を特に重大視するのが常である。

經驗論者(ロック)に從へば、人心は、本來、白紙(tabra rasa)と同樣、何等先天的に與へられたものがなく、理性といふが如きも、特殊能力ではなく、經驗に依存し、經驗の成果としてのみ存在し得るものであり、隨つて、認識は、經驗に依存してのみ、又は經驗分內に於てのみ可能であり、おのづから又神や本體等の經驗に基づかない、形而上學的知識は、確實性を具へてゐないのである。但し、經驗乃至感覺は、一經驗、一感覺としては確實であるが、其以外には適用することが出來ず、唯一部からこれに類似する他の一部を推論するものであるが故に、これに依る認識は、單に相對性・特殊性・蓋然性を有するだけで、絶對性・普遍性・必然性を有するものではない。

以上の略述によつて明かなやうに、理性論と經驗論とは、其の內容に於ても、又其の價値に於ても、等しく對立的關係を形造るものである。卽ち

一方の長所は他方の短所であり、一方の短所は他方の長所となつてゐる。

理性論は、認識の要素の形式的・先天的・合理的・論理的・普遍的方面を重視する點に於て、卽ち、理性は、本來普遍的であるから、これによつて得た認識は確實性を有し、且普遍性・必然性を有すると見る點に於て、經驗論に優るが、認識の要素の實質的・後天的・非合理的・心理的・特殊的方面を蔑視する點に於て、經驗論に劣るのである。

これに對し、經驗論は、認識の要素の實質的・後天的・非合理的・心理的・特殊的方面の價値を高調する點に於て、理性論に一歩を拔くが、認識の要素の形式的・先天的・合理的・論理的・普遍的方面を排除する點に於て、理性論に一段劣るのである。

斯くして、理性論も經驗論も、只一つだけでは、不完全で、兩者が補合する時に始めて全き認識要素論が成立するのである。そして玆に、批判論の存在理由が横たはつてゐる。

(3) **批判論**。これは、理性及び經驗を以て、認識の不可缺的要素と見、且この兩要素の共働作用の結果として認識が成立するとなすものである。

批判論に從へば、認識は、經驗を俟つて、又は經驗と共に成立するけれども、經驗から成立するものでもなく、又は、經驗のみに依つて成立するものでもない。蓋し、人間は、單に經驗に對して受動的になるばかりでなく、進んで經驗を齊整し統一する能力卽ち理性を、經驗に先んじて卽ち先驗的に稟有してをり、經驗は、この先驗的理性を觸發するために、素材又は機會を提供することによつて、認識の一要素となるものだからである。併しながら、理性も、其自身だけでは發動することが出來ず、必ず經驗に俟たなくてはならないのである。

要するに、批判論に從へば、認識は、理性を形式とし、經驗を素材とし、且前者を以て後者を統一することによつて、成立すると共に、認識の形式は經驗分內に於てのみ統一力を有するのである。

斯くの如く、批判論は、理性と經驗とを認識の不可缺的要素とする點に於て、卽ち、認識の理想的方面、詳しくは、普遍性、必然性と形式とを認め、其の根據を確立する點に於て、理性論を採用し、認識の現象的方面、詳しくは、特殊性、卽ち、內容と客觀的要素とを認め、其の發生を明かにする點に於て、經驗論を採用してゐるといふ意味では、理性論と經驗論とを公平に折衷して認識要素論に一段落を附したかのやうに思はれるが、實は、幾分理性論に傾いてゐるのである。何となれば、批判論は、客觀的に妥當な認識の據礎を動機とし、且先驗的な理性を以てかかる認識成立の根本條件とすると共に、理性を發動的創造的なもの、卽ち、客觀の構成者又は自然界の立法者と見、更に、認識は、認識主觀がこの理性によつて外界を規制した結果としてのみ成立すると見る所に、批判論の眞趣が存するからである。これ、批判論が先驗論と呼ばれる所以である。

尙、批判論によつて經驗論に修正を試みたものは、經驗批判論であるが、折衷論の範圍を出てゐないのに對し、ヘーゲル(Hegel)の辨證的認識論は、批判論と異つた立場及び方法から理性論と經驗論とを綜合したものであり、フッセル(Husserl)の現象學も理性論と經驗論との中間に位する。

第三項　認識の對象

(一)　意義。　認識の對象(Object)論は、認識の客觀性又は妥當性を對象とする認識論の一分野で、如何にして其の本源に於て主觀的な認識が客觀的妥當性を有し得るか、又は、吾々の認識し得るものの本質は何か、それは全然主觀的なものか、それとも客觀的なものか、若し客觀的なものとしたなら、其の客觀的對象は如何にして、成立し得るか、更に、主觀的には確實性を有し、客觀的には普遍性を有する認識とは何か、といふやうな問題に解答を與へるのが、卽ち、一言にすれば、認識と其の對象との關係、又は、認識の客觀的價値の條件及び限界を闡明するのが、認識對象論の任務である。

認識の對象論は、リッケルトの所謂「認識の對象と對象の認識」といふ認識作用の二大要因の一たる對象を對象とするものであるが故に、通例、認識の本質論とも呼ばれ、狹義の認識論中最も重要な部分を占めるものである。

(二) 種類。 認識の對象論に、實在論・觀念論・現象論の別がある。

(1) **實在論**。(Realism)。これは、認識の對象は、客觀世界に獨立的に存在し、主觀又は意識を超越する實在であるとするものである。別言すれば、認識は、吾々の觀念が外界に存在する實在より刺激を受ける結果、これを模寫することによつて成立するとするものである。

(2) **觀念論**(Idealism)。これは、認識の對象は、主觀的な觀念、卽ち、認識主觀の意識內容であり、隨つて、認識は、吾々の觀念が構成したもので、實在といふが如きものも、觀念に依存する限りに於てのみ存在し、決して、觀念卽ち認識主觀を超越して獨立的に存在するものではないとするものである。

實在論と觀念論とは、全然正反對な見解であり、且其の長短共一面的な所に、卽ち、前者は客觀に偏し、後者は主觀に傾く所に存する。隨つて、兩者の關係は、矛盾的なものではなくて補合的なものであるが故に、一層根本的な又は一層包括的な見地に立てば、兩者を調和統一することが出來るのである。この立場がやがて現象論である。

(3) **現象論**(Phänomenalism)。これは、認識の對象は、客觀と主觀又は實在と意識との協力によつて、別言すれば、實在としての物自體(Ding an sich)が意識(感性)を觸發(affizieren)して、其の中に生起せしめた現象であつて、物自體、卽ち認識主觀や意識を超越した獨立的實在でもなく、又實在と全然沒交涉な個々の意識卽ち觀念の所產でもなく、實在的にして觀念的なものだとするものである。これ、現象論が、實在論と觀念論とを折衷調和したものだといはれる所以に他ならない。

實際、現象論は、實在論と觀念論との長所を併せ活用したものである。

但し、嚴密にいへば、現象論は、觀念論に一層近似してゐる。現象論に從へば、認識の對象は、只現象となつたもの、卽ち、實在が觀念に現れた象だけ、詳しくは、認識主觀たる觀念、卽ち、意識一般によつて規制され、統一されたもののみで、實在其のもの卽ち物自體は、さながらには認識されないし、而も、「觀念に現れる」といふことは、實在を觀念が受動的に模寫するといふことではなくて、倒に、觀念が發動的に實在を規制するといふことだからである。現象論が、普通の觀念論に對して特に批判的觀念論と呼ばれる所以が、やがて茲に存する。

尙、現象論に於ける主觀は、個人的主觀卽ち經驗的主觀ではなくて、普遍的主觀卽ち先驗的主觀であり、隨つて、現象論は、認識の客觀性は先驗的主觀一般の形式を成す統一作用に基くと見る點に於て、先驗的觀念論とも呼ばれる。

最後に、現象論は、認識は現象のみに限られて、現象を惹起する超越的存在、卽ち、物自體は全く認識し得ないが、而もこれは、實踐理性、卽ち、情意の對象であるとしてゐる。この物自體も、大まかな意味では認識し得るものとするもの、卽ち、體驗又は純粹意識と見ることによつて、現象論の缺陷を匡補するものは、現象學又は體驗哲學の認識對象論であり、認識の對象は所與ではなくて、課題卽ち、先驗的な意識一般の構成した意識內容であるとするものは、新カント派の認識對象論である。

第四節　認識の理想――眞理

認識の理想論は、認識論の精髄又は堂奥である。認識に關する一切の論議は、正しき認識卽ち普遍妥當的な、眞に客觀的價値ある認識を獲得することを究極目的とするものだからである。尙、認識の理想は、普通、眞理又は論理的價値と呼ばれてゐるが故に、認識の理想論は、眞理論とも論理哲學とも呼ばれる。

以下、性質・動力・標準・種類・價値の五項に別つて、認識の理想を略述することとする。

第一項　眞理の性質

(一)　意義。　眞理は、認識の理想・標準・規範で、何人も、且何時何處でも認むべき價値ある知識、卽ち、普遍妥當性を有する知識であり、觀念と觀念・思想と思想・判斷と判斷、又は、觀念や思想や判斷の形式と內容との正しい關係卽ち完全な一致であり、隨つて、それは勿論、觀念や思想其のものでもなく、事物其のものでも、又事物の性質・狀態でもない。これ、眞理は「存在する」といふべきではなくて「妥當する」といふべしとされ、「存在的にして存在論的のものである」とされる所以である。實に、眞理は、一言に妥當的實在である。

(二)　種類。　斯くの如く、眞理は、直接には、觀念間・思想間の關係中に成立するものであるが、觀念や思想は必らず其の對象を有するが故に、眞理は、當然これらと實在との關係を豫想するものである。斯くして、眞理の性質に關して、模寫說及び構成說といふ二つの反對說が成立することとなるのである。

(1)　**模寫說。**　これは、眞理は、觀念又は主觀が超越的な實在を模寫した

もの、卽ち、觀念が實在と正しく一致契合したものとする眞理說で、恰も實在論に近似する。

(2) **構成說**。これは、眞理は、普遍的な先驗的自我が構成したもので、其の特質は、必ず考へなくてはならない、又は、それ以外には考へることを許さないといふ條件、卽ち「思惟の必然」といふ條件を具へる所にあるとする眞理說で、觀念論に起因する。

以上の二見解は、勿論、構成說が正しい。眞の實在は、自覺的、創造的なものであるが故に、模寫することが出來ないからである。假に、實在が純粹に客觀的のものであるとしても、これが本質を十分に現はにし、且これを正しく認識するには、理性が發動的形成的であるかぎり、模寫と構成との統一が必要であると共に、知識が實在に一致契合することによつて眞理となる前に、知識が成立し實在が存在することが眞理であり、且知識と實在との一致契合はデカルト(Descartes)やフッセル等の所謂意識の明證に依たなくてはならないし、更に實在に一致しない眞理(例へば直線は二點間の最短距離の如き)もあるからである。否、眞理は、他に依存して成立するものでなくて他を成立させるものだからである。事實、眞理を假定することがなくては、何等の立言も出來ず、又、ボルツァーノ(Bolzano)の言の如く、「少くとも眞理が一つある」ことは、意識又は判斷可能の根本假定でなくてはならないのである。

要するに、眞理は、判斷の規範、思惟の基本要求又は認識の理想であるが故に、普遍的客觀的にして先驗的な思惟一般が、或る對象について下した判斷が當然必然さう考へなくてはならないとし、且判斷の主觀と客觀とが一致するといふ明證性を伴つたものである。

第二項　眞理の動力

(一) **意義**。眞理の動力は、眞理を構成する原動力である。

(二) **種類**。眞理の動力に關する觀方に、主知主義・主情意主義・理性主義の別がある。

(1)主知主義は、眞理の動力を理知と見るものであり、(2)主情意主義は、情意と見るものであり、(3)理性主義は、理性と見るものである。そして理性主義が最も妥當である。蓋し、眞理は、認識の理想であるが故に、それは全意識的作用であり、隨つて、眞理の動力は全意識の統制者でなくてはならないのに、概念的思惟力・當爲力・目的理想力・理念原理の認識力、乃至最高實在者の直觀體驗力たる理性こそは、これに該當するものだからである。別言すれば、眞理は、正しいと思はるべきものである點に於て、知的・客觀的であるが、正しいと信ぜらるべきものである點に於て、情意的・主觀的であるべきであり、且理知も情意も離れ離れに作用しては、眞理といふ全一體を創造することが出來ないからである。但し、眞理は、論理的價値であるが故に、其の直接動力は理知であり、隨つて其の原動力を理性と呼ばれるのである。

第三項　眞理の標準

(一) **意義**。眞理の標準は、眞理をして非眞理卽ち虛僞から區別せしめ、眞理の高下を始め、諸多の種別を決定する規準である。

(二) **種類**。眞理の標準に關する見解に、形式說・實質說・調和說の別がある。

(1) **形式說**。これは、判斷の形式其のもの、卽ち、完全な判斷又は理想的判斷(例へば「思性必然性」とか「中庸」とか)を基準とするものである。

(2) **實質說**。これは、判斷の內容、卽ち、判斷の目的又は效果(例へば判斷の生物學的有用とか、實生活に對する效果とか)を以て標準とするものである。

(3) **調和說**。これは、形式說と實質說とを調和したものである。

眞理の標準は、眞理の價値と密接な關係を有する問題で、若し眞理を絶對的のものと見るに時には形式說が妥當であり、眞理を相對的のものと見る時には實質說が適切である。然るに、眞理は理想であり、理想は唯形式的にしか規定し得ないものであるかぎり、形式說が妥當である。

但し、眞理其のものは超時間的であるが、其の成立には時を要するが故に、卽ち、眞理は歷史的創造であるばかりでなく、眞理を活用する場合には、必ず具體的な何ものかが具體的な何ものかを目的又は對象とし、且それに對して有效なものでなくてはならないし、而も個々の動力・目的・對象・效果はすべて個別的・特殊的・相對的なものである點から見れば、實質說にも亦一理がある、といはなくてはならない。

併しながら、眞理其のものは、活用の有無によつて其の價値が決定されるものではなくて、寧ろ眞理であるが故に活用されるものであるから、其自身完具してゐさへすれば、卽ち理想として完全でありさへすればよいのである。勿論、最高理想でないものでも眞理と見做されるものがないでもないが、これらは、唯最高理想としての唯一の眞理を豫想し、且それを俟つてのみ、眞理としての價値を具へるものであることは、「よりよい」といふことは「最もよい」といふことを豫想してのみ可能であることと同樣である。隨つて、普通いふ所の實質的眞理なるものは、不完全な眞理であり、且これを許すことは、眞理の標準は實質でなくてはならないといふことと趣を異にするのを忘れてはならない。

但し、これは、眞理を單に論理的價値として見た場合であるが、これを人生に於ける理想價値の一部分として、卽ち一個の文化價値として見る時には、これと異り、眞理の究極標準は全體としての人生の理想、卽ち全體としての理想價値でなくてはならない。

第四項　眞理の價値

（一）**意義**。眞理の價値は、眞理の妥當の內容卽ち活用の妥當範圍である。

（二）**種類**。眞理の價値に關する觀方に、相對論と絕對論との別がある。

(1) 相對論(Relativism)。これは、眞理の價値を相對的に見、如何なる眞理と雖も完全なものがなく、皆特殊的條件に應じて變化すると見るものである。

(2) 絕對論(Absolutism)。これは、眞理を絕對完具にして永恒的なものと見るものである。

相對論は、眞理と眞理の活用とを混同したもの、又は眞理を廣義に解したものであり、隨つて、嚴密な眞理觀としては、不完全であるのに對し、絕對論は、眞理を認識の最高理想と見る狹義の眞理觀としては妥當である。

實に、最高眞理は絕對的のものでなくてはならない。併しながら、この種の眞理は、理想であり、基本要求であり、所謂限界概念であるが故に、普通の意味では存在しないと共に、眞の絕對は、相對と絕對との絕對的統一であることを忘れてはならない。隨つて、眞理は相對的にして絕對的であると見るのが一番妥當である。

但し、眞理の相對性は、前述の如く、其の絕對性を豫想し、且それと交涉を保つ限りに於てのみ、眞理の一特質を形造るものである點から見れば、卽ち、絕對性は、相對性よりも一層本源的なものであり、一層高次なものであつて、絕對性から相對性を導き出すことは出來るが、相對性から絕對性を導き出すことが出來ない點から見れば、眞理は、（相對性を包含するものとして）絕對的であるといはなくてはならない。隨つて、眞理は超時間的・永遠的である。

第五項　眞理の種類

（一）**意義**。眞理を、狹義に解すると、卽ち、これを絕對的のものと見ると、

一つしかないが、廣義に解すると、卽ち、相對―絕對的なものと見ると、ボルツァーノの言の如く、「少くとも一つ」、卽ち一つ以上あり得る。

（二）種類。眞理の主なる種類は、絕對的眞理と相對的眞理以外、形式的と實質的、理性的と事實的、客觀的と主觀的、理論的と實際的、一般的と特殊的、哲學的と科學的、知的と情的と意的等に別つことが出來る。

稿本　哲學概論　終

【附錄】研究問題

（一）哲學の意義
（二）哲學の定義
（三）哲學の語義
（四）哲學の形式
（五）哲學の構造
（六）哲學的精神
（七）哲學の本質
（八）哲學の內容
（九）哲學の分野
（一〇）哲學と科學
（一一）哲學の方法
（一二）哲學の態度
（一三）哲學の體系
（一四）哲學の價値
（一五）人生論の意義
（一六）價値の本質
（一七）人生觀の種類
（一八）人生觀の方法よりの分類
（一九）人生觀の態度よりの分類
（二〇）人生觀の內容よりの分類

(二一) 方法上の人生觀の叙述及び批評
(二二) 懷疑的人生觀の叙述及び批評
(二三) 否定的人生觀の叙述及び批評
(二四) 肯定的人生觀の叙述及び批評
(二五) 個別主義的人生觀の叙述及び批評
(二六) 普遍主義的人生觀の叙述及び批評
(二七) 現實主義的人生觀の叙述及び批評
(二八) 理想主義的人生觀の叙述及び批評
(二九) 唯物主義的人生觀の叙述及び批評
(三〇) 唯心主義的人生觀の叙述及び批評
(三一) 人生の定義
(三二) 自覺とは何ぞ
(三三) 人生の本質
(三四) 人生の精髓
(三五) 人生の形態
(三六) 人生の内容及び分野
(三七) 人生の過程
(三八) 宇宙論の意義
(三九) 宇宙論の種類
(四〇) 宇宙の本質
(四一) 認識論の意義及び價値
(四二) 認識論の分野
(四三) 認識可能論の叙述及び批評
(四四) 唯理論の叙述及び批評
(四五) 經驗論の叙述及び批評
(四六) 認識要素論に於ける批評論とは何ぞ
(四七) 實在論の叙述及び批評
(四八) 觀念論の叙述及び批評
(四九) 現象論とは何ぞ
(五〇) 眞理の性質
(五一) 眞理の動力
(五二) 眞理の標準
(五三) 眞理の價値
(五四) 眞理の種類

附錄 終

昭和十五年五月三十日印刷
昭和十五年六月八日發行

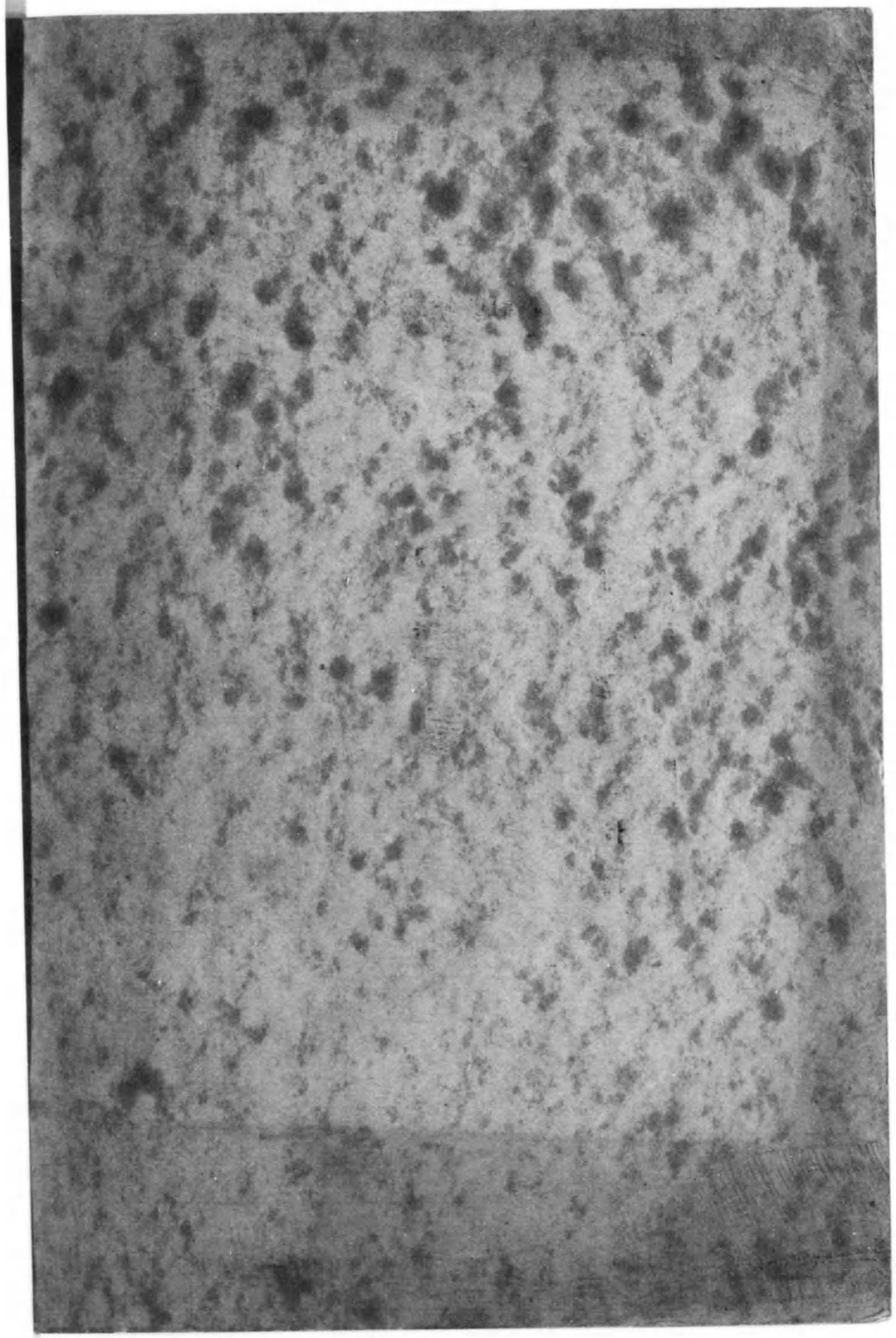
哲學概論
定價金一圓

著者　稻毛金七

發行者　東京市牛込區早稲田鶴巻町四三六　抜井美子吉

印刷所　東京市牛込區早稲田鶴巻町四〇五　守田印刷所

不許
復製

發行所　東京・牛込
早稲田大學前通　世界堂書店

終